南琉球の三型アクセント体系[1)]

―その韻律単位に関する考察―

松　森　晶　子

1．はじめに

松森（2010）は、従来二型アクセント体系だと考えられていた宮古諸島の多良間島方言に、明瞭な三型体系が存在していることを記述・報告した。また、そこに観察される３種のアクセント型の区別は、琉球祖語に想定される３つの系列[2)]の語彙と（例外もあるが）対応していることも報告し、あわせて、この多良間島方言の３種類のアクセント型に所属する語彙のリストを公表した。続く松森（2013a）では、その多良間島のアクセント型別の語彙のリストを使用して宮古島の与那覇方言を調査し、この与那覇方言にも明瞭な三型アクセント体系が存在していることを報告した[3)]。また松森（2013b）では、その与那覇方言には、モーラやフットという単位のほかに、それより大きい韻律上の単位を想定する必要があることを指摘し、その単位のことを「音調領域（tonal domain）」と呼んだ。

さらに松森（2014）は、松森（2010）の提案した多良間島アクセント規則の修正案を提示したが、その中で、この多良間島方言のアクセントの位置を正しく予測するためにも、先述の与那覇方言に想定されるものと同じような韻律上の単位が必要とされることを論じ、それを「韻律領域（prosodic domain）」と呼び変えた。

つまり宮古諸島の与那覇方言と多良間島方言という２つの三型アクセント体系には、（両者の表面のアクセント型は大きく異なり、一見したところ別々の仕組みが存在するかのように見えるにも関わらず）、同じような韻律上の単位を想定しなければならないことを、松森はこれまでに示してきたことになる[4)]。本稿では、これら宮古諸島に想定されるその韻律上の単位のことを、Igarashi et al.（forthcoming）、五十嵐（2015）、松森・五十嵐（2014）にしたがい、「韻律語（Prosodic Word）」と呼んで分析を行っていくこととする[5)]。

現在、宮古諸島に次々と発見されつつある三型アクセント体系の記述においては、（モーラやフットなどに加えて）それより大きい韻律上の単位が必要とされることが、徐々に分かってきている（Igarashi et al.（forthcoming）、五十嵐 2015、松森・五十嵐 2014、松森 2013b、2014、近刊）。本稿の主旨は、同じような韻律上の単位が、宮古諸島以外の南琉球の諸方言にも広く観察されることを記述・報告することである。より具体的に言えば、この単位を想定して八重山諸島のアクセント調査を試みた結果、黒島方言、小浜島方言、西表島の古見方言にも、あらたに３型アクセ

ント体系が発見されたことを報告する。

これら八重山諸島の方言は、50年ほど前に行われた先行研究による調査報告（平山ほか1967）によって「二型アクセント」体系であると認定されて以来、その記述結果が広く通説として受け入れられてきたものである。しかしながら本稿では、上述のような韻律単位を想定し、それを韻律句内部に３つ連続させることによって、これら八重山諸島の方言にも、明瞭な三型アクセント体系の存在が確認できる（複合語から始まる韻律句の場合は、韻律語が２つの場合でも観察されることがある）ことを論じる。

また本稿では、この韻律上の単位を想定して調査を行えば、波照間島にも「Ａ，Ｂ，Ｃ系列」に相当する南琉球祖語の３種のアクセント型に対応する型の区別が依然として保たれている可能性があることも示唆する。

最後に、南琉球のアクセント体系について発見されたこれらの諸事実に基づき、琉球語史に関連したいくつかの通時的な考察を行う。特に、このモーラや音節より大きい「韻律語」という単位は、すでに南琉球祖語（宮古諸島と八重山諸島の祖先の言語体系）の段階で、その体系内部に存在していたという仮説を、本稿ではあらたに提示する。

２．宮古諸島の韻律上の単位―多良間島方言と宮古島狩俣方言を例にして

２．１　多良間島の三型アクセント体系

松森（2010、2014、近刊）、松森・五十嵐（2014）、五十嵐（2015）は、多良間島方言の三型アクセント体系の仕組みについての考察を行っている。以下、それらの分析によってこれまで判明してきたことの概要を述べる。

以下、多良間島に観察される３種のアクセント型を、松森（2010、2014）に従って、「ａ型、ｂ型、ｃ型」と呼ぶこととする。この多良間島方言はピッチの下がり目の位置が有意味な体系として記述できる[6)]。したがって本稿の多良間島方言の記述においては、そのピッチの下がり目の位置に] という記号を付けて示すだけにとどめ、その上がり目の位置については特に明記しない。

多良間島方言の３種のアクセント型の対立は、たとえば、各名詞に２モーラ以上の助詞を後続させることによって、はっきりと観察することができる。(1) は、２モーラの助詞 mai（も）をａ、ｂ、ｃの各型に所属する名詞に後続させ、「～もある、～も見える」のような文を発音してもらった際に出現した、最初の文節部分のアクセント型を示す[7)]。「にんにく pil、クバ kuba、唐辛子 kuusju、テリハボク jaroo」はａ型の名詞、「麦 mugi、芋 mm、豆 mami、葱 sunna」はｂ型の名詞、「キャベツ tamana、冬瓜 siburu、アダン adan、蜜柑 funuu」はｃ型の名詞である[8)]。

(1) 多良間島の三型アクセント

［ａ型］	pi.l	ma.i…	（にんにくも～）	ku.ba	ma.i…	（クバも～）
	ku.u.sju	ma.i…	（唐辛子も～）	ja.ro.o	ma.i…	（テリハボクも～）
［ｂ型］	mu.gi	ma.]i…	（麦も～）	m.m	ma.]i…	（芋も～）
	ma.mi	ma.]i…	（豆も～）	su.n.na	ma.]i…	（葱も～）
［ｃ型］	ta.ma.]na	ma.i…	（キャベツも～）	si.bu.]ru	ma.i…	（冬瓜も～）
	a.da.]n	ma.i…	（アダンも～）	fu.nu.]u	ma.i…	（蜜柑も～）

この（1）の例から、多良間島では、ａ型の名詞から始まる文節にはどこにも下がり目が出現せず[9]、ｂ型名詞から始まる文節にはその助詞（この場合は mai）内部に下がり目が出現し、ｃ型名詞から文節が始まる場合には、その名詞の内部に下がり目が出現していることが分かる。

しかしｂ型の下がり目は、常に助詞の内部に出現するとは限らない。次の（2）と（3）の例は、複合語から始まる句に、同じ助詞 mai を後続させ、「～畑も見える、～木もある」のようなセンテンスを発音してもらった際の最初の文節のアクセント型を示す。ここで特に注目されるのは、ｂ型名詞から始まる例において、その下がり目は複合語に後続する助詞（この場合は mai）の内部ではなく、複合語の後部要素に出現している、という事実である[10]。

(2) 多良間島の三型アクセント（複合語から始まる韻律句その１）

［ａ型］pi.l pa.ru ma.i…（にんにく畑も～）　ku.u.sju pa..ru ma.i…（唐辛子畑も～）
［ｂ型］mu.gi pa.]ru ma.i…（麦畑も～）　su.n.na pa.]ru ma.i…（葱畑も～）
［ｃ型］ta.ma.]na pa.ru mai…（キャベツ畑も～）　si.bu.]ru pa.ru ma.i…（冬瓜畑も～）

(3) 多良間島方言の三型アクセント（複合語から始まる韻律句その２）

［ａ型］ku.ba gi.i ma.i…（クバ木も～）　ja.ro.o gi.i ma.i…（てりはぼく木も～）
［ｂ型］ma.mi gi.]i ma.i…（豆木も～）　m.m gi.]i ma.i…（芋木も～）
［ｃ型］a.da.]n gi.i ma.i…（アダン木も～）　fu.nu.]u gi.i ma.i…（蜜柑木も～）

つまりｂ型の下がり目は、（それがどのような形態上の単位かということにかかわらず）常に２つ目の韻律的な単位に出現するのである。

以下、このような韻律的な単位のことを「韻律語（Prosodic Word）」と呼び、必要に応じてPWと記すことにする。多良間島では、複合語の前部要素、その後部要素、２モーラ以上の助詞、などが、それぞれ独立した「韻律語」を形成し、それがアクセントの位置を算出する際に「数える単位」として機能していることが、上述の記述から分かる。松森（2014）、松森・五十嵐（2014）、五十嵐（2015）などのこれまでの議論に基づいて、この多良間島のアクセント規則の要点をまとめると、次の（4）に示すようになる。

(4) 多良間島方言の三型アクセント体系の仕組み

（松森 2014、松森・五十嵐 2014、五十嵐 2015に基づく）

（a）その体系内の３種のアクセント型は、ピッチの下降の有無とその位置の違いによって区別される。
（b）それぞれの型のアクセントは、次のように出現する。
〈ａ型〉アクセントがない、〈ｂ型〉２つめのPWに出現、〈ｃ型〉最初のPWに出現
（c）アクセントは、原則的にそれぞれのPWの次末モーラに出現する。

また、そのアクセント情報をもとにしたピッチの実現は、次のような音調付与規則によって説明できる。

(5) 多良間島の音調付与規則（松森・五十嵐 2014に基づく）[11]

(a) H音調付与規則

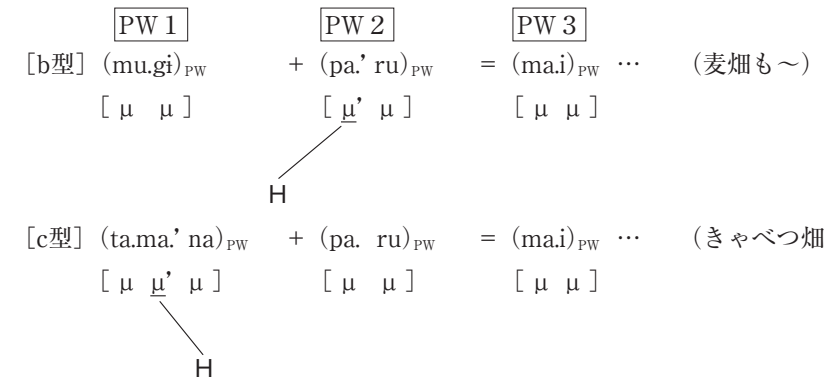
韻律句の最初のモーラから、アクセントのあるモーラまでを高くする。

(b) L音調付与規則

アクセントを持つモーラの直後のモーラから、韻律句の最後のモーラまでを低くする。

多良間島のb型とc型の下がり目は、次のように、各韻律語の後ろから数えて２つ目のモーラ（以下、これを「次末モーラ」と呼ぶ。）に実現する（以下、便宜的にアクセントをHで示し、それが実現するモーラ(μ)に下線を付けて示す)。なお以下、「’」は、アクセントの位置情報を示す記号とする。つまり本稿では、］は単なる音声的なピッチの下がり目の位置を示す記号なのに対して、’は、アクセントの位置を示す記号として使用する。

(6) 多良間方言の韻律構造とb型とc型のアクセントの実現



以上、多良間島方言を例にして、その体系には「韻律語（Prosodic Word)」という単位が想定できることを論じてきた[12]。

２．２　宮古島狩俣方言の三型アクセント体系

さて、その後の調査によって、多良間島方言や与那覇方言と同じような韻律上の単位が、宮古島の狩俣方言にも存在することが判明した[13]。この狩俣方言も、多良間島方言と同様、ピッチの下がり目の位置が有意味な体系である。したがって多良間島方言と同じように、この狩俣方言の記述においても、以下、そのピッチの下がり目の位置に ］ という記号を付けて示すだけにとどめ、その上がり目の位置については明記しない。

前節で扱った多良間島方言とは異なり、狩俣方言では、韻律語が２つしか続かない場合には、その３種類の型の区別は明瞭に出現しない。以下の（7）は、ａ、ｂ、ｃの各型に所属することを最終的に確認できた名詞[14]のみについて、その助詞付き接続形のアクセント型を示す。(7) は、それらの名詞に mai＝du（もゾ）を後続させ、「～もゾある ～mai du al（見える miirarul)」のようなセンテンスを発話してもらった場合の最初の文節部分の型である。

(7) 宮古島狩俣方言のアクセント（その１）

［a 型］	z.zu	ma.]i. du…	（魚もゾ～）	ma. ɨ	ma.]i. du…	（米もゾ～）
	ku.u.su]	ma.i. du…	（唐辛子もゾ～）	ja.a.ma	ma.i. du…	（八重山もゾ～）
［b 型］	mu.gɨ	ma.]i. du…	（麦もゾ～）	ma.mi	ma.]i. du…	（豆もゾ～）
	gu.ma	ma.]i. du…	（胡麻もゾ～）	i.ki.]ma	ma.i. du…	（池間もゾ～）
	ja.mu.]tu	ma.i. du…	（大和もゾ～）	u.kɨ.na.]a	ma.i. du…	（沖縄もゾ～）
［c 型］	wa.]a	ma.i. du…	（豚もゾ～）	sɨ.]c	ma.i. du…	（ソテツもゾ～）
	zɨ.ma.]mi	ma.i. du…	（ピーナツもゾ～）	ta.ra.]ma	ma.i. du…	（多良間もゾ～）

(7) を見ると、この方言の c 型の語は、安定して最初の韻律語内の次末モーラに下がり目が出現していることが分かる。これに対し a 型と b 型のアクセント型は、このような条件下では両者とも同じようなアクセント型で出現することも多く、２つの型を区別し分けることは難しい。このことは、多良間島と違ってこの狩俣方言では、特定の名詞に２モーラ以上の助詞を後続させる、という方法では、その名詞が３つのアクセント型のうちのどれの所属語彙なのかを、正確に判断することが困難であることを示している。

ところがこの狩俣方言の３種類の型の区別は、松森（2013）で論じた与那覇方言と同様、たとえば $(\text{suu})_{PW}$ $(\text{pari})_{PW}$ $(\text{kara}=\text{du})_{PW}$「冬瓜畑からゾ～」のように、ひとつの韻律句内部に３つの韻律語を並べてみると、はっきりと観察することができる。次の (8) の例は、狩俣方言の各名詞を前部要素にした「～畑」という複合語を作成し、それを「～からゾ来る ～kara du ffu」のような文に入れて発音してもらった場合の、文節部分のアクセントを示す。説明の便宜上、分析結果から先に述べると、狩俣方言の「冬瓜 suu、唐辛子 kuusu」は a 型の名詞[15]、「麦 mugɨ、豆 mami」は b 型の名詞、「キャベツ tamana、砂糖黍 buugɨ 」は c 型の名詞である。

(8) 宮古島狩俣方言の三型アクセント体系（複合語から始まる韻律句その１）

［a 型］	su.u	ba.ri	ka.ra.]du…	（冬瓜畑からゾ～）[16]
	ku.u.su	ba.ri	ka.ra.]du…	（唐辛子畑からゾ～）
［b 型］	mu.gɨ	ba.]ri	ka.ra.du…	（麦畑からゾ～）
	ma.mi	ba.]ri	ka.ra.du…	（豆畑からゾ～）
［c 型］	ta.ma.]na	pa.ri	ka.ra.du…	（キャベツ畑からゾ～）
	bu.u.]gɨ	ba.ri	ka.ra.du…	（砂糖黍畑からゾ～）

ここから、この狩俣方言も、三型アクセント体系を持っていることが分かった。

さらに、(8) と同じ複合語を「～の後ろにある～nu cjibi ndu al 」のようなセンテンスの中で発話してもらった場合も、次のように３種類の型の区別が出現することが確認できた。

(9) 宮古島狩俣方言の三型アクセント体系（複合語から始まる韻律句その２）

［a 型］	su.u	ba.ri	nu	cji.bi] n du…	（冬瓜畑の後ろにゾ～）
	ku.u.su	ba.ri	nu	cji.bi] n du…	（唐辛子畑の後ろにゾ～）

［b型］	mu.gɨ	ba.ri］	nu	cji.bi ］	n du…	（麦畑の後ろにゾ～）
	ma.mi	ba.ri］	nu	cji.bi ］	n du…	（豆畑の後ろにゾ～）
［c型］	ta.ma.]na	ba.ri	nu	cji.bi ］	n du…	（キャベツ畑の後ろにゾ～）
	bu.u.]gɨ	ba.ri	nu	cji.bi ］	n du…	（砂糖黍畑の後ろにゾ～）

以上のデータから、多良間島方言と同様、狩俣方言でも、そのa型の語から始まる音調句にはアクセントがなく[17]、b型の語は２つ目の韻律語に、c型の語は１つ目の韻律語に、それぞれアクセントがあることが分かった。

以下の例は、その３つの韻律語PWを持つ韻律句の構造と、それぞれの型のアクセントの位置を示している。

(10) 宮古島狩俣方言の３種類の型の韻律構造とアクセント

	PW 1		PW 2	PW 3		
［a型］	(ku.u.su)$_{PW}$	+	(pa.ri)$_{PW}$	(ka.ra＝du)$_{PW}$	…	（唐辛子畑からゾ～）
	(su.u)$_{PW}$	+	(pa.ri)$_{PW}$	(ka.ra＝du)$_{PW}$	…	（冬瓜畑からゾ～）
［b型］	(mu.gɨ)$_{PW}$	+	(pa.’ ri)$_{PW}$	(ka.ra＝du)$_{PW}$	…	（麦畑からゾ～）
	(ma.mi)$_{PW}$	+	(pa.’ ri)$_{PW}$	(ka.ra＝du)$_{PW}$	…	（豆畑からゾ～）
［c型］	(ta.ma.’ na)$_{PW}$	+	(pa.ri)$_{PW}$	(ka.ra＝du)$_{PW}$	…	（キャベツ畑からゾ～）
	(bu.u.’ gɨ)$_{PW}$	+	(pa.ri)$_{PW}$	(ka.ra＝du)$_{PW}$	…	（砂糖黍畑からゾ～）

以上の点から、狩俣方言のピッチの下がり目は、原則的に多良間方言と同じ位置に出現することが分かった。また、それぞれの型のピッチの下降位置は、指定された韻律語（PW）の「次末モーラ」に出現する、という点も両方言に共通している。したがって本稿では、狩俣方言のアクセントは次のような仕組みを持っていることを提案したい。

(11) 宮古島の狩俣方言アクセントの仕組み

(a) その体系内の３種の型のアクセントは、ピッチの下降の有無とその位置の違いによって区別される。

(b) それぞれの型のアクセントは、次のように出現する。

〈a型〉アクセントなし、　〈b型〉２つめのPWに出現、　〈c型〉最初のPWに出現

(c) 下降は、原則的にそれぞれのPWの次末モーラに出現する。

また狩俣方言の具体的なピッチの出現は、(5) で論じた多良間島方言の音調付与規則と同じ規則によって予測できるものとする。（紙面の都合上、ここでは繰り返さない。）

さて、注15でも述べたように、多良間島でa型のアクセントを持つ名詞の多くが、狩俣方言ではb型のアクセントと合流を遂げているため、狩俣方言のa型名詞は、その所属語の数が他の型に比べて極端に少ない。また、前述のように、狩俣方言は多良間島方言と違って、ある名詞がa型に所属するのか、b型に所属するのかは、単にその名詞に２モーラ以上の助詞を後続させた文

の中で発話してもらうだけでは判断しにくい。少なくともその名詞を先頭にして、３つ以上の韻律語をひとつの韻律句の中に実現させるような文を作成して発音してもらった上で、検討しなければならない。

ところで、これまでの多良間島方言や与那覇方言の調査の経験から、３種の音調型の区別がもっとも明瞭に出現するのは、

①韻律語が「３つ」並び、しかも

②最初の２つの韻律語が、それぞれ複合語の語根である、

という２つの条件が揃った場合であることが、経験的に分かっている。たとえば与那覇方言では、「砂糖黍 buugɨ」という語のアクセント型を知るためには、まずそれを前部要素にした複合語（たとえば「砂糖黍＋畑」）を作成し、その複合語を先頭にして、［(buugɨ)$_{PW}$ (naka n)$_{PW}$ (kee du)$_{PW}$（砂糖黍畑へゾ）」のように、３つの韻律語を韻律句の中に並べて発音してもらい、その型を観察するのがよい。

そこで、狩俣方言においても様々な複合語を使って調査を試みた[18]。その結果、「八重山」「大和」「多良間」などの地名から始まる複合語（「大和＋人」「多良間＋言葉」など）に、２モーラ以上の助詞、あるいは助詞連続が後続した場合に、ａ型とｂ型の対立がもっとも明瞭に出現することが判明した。たとえば「大和人の舟が見える。」「多良間言葉も聞こえる。」のような文を、狩俣方言の話者に発音してもらうと、その韻律句内に３種のアクセント型の区別があることをはっきりと確認することができる。

すでに述べたように（多良間島方言と違って）狩俣方言では、名詞単独の言い切り形や、その名詞に２モーラ以上の助詞や助詞連続が続いた場合には、３種の型の区別が明瞭に出現しない。これと同じことが、地名のアクセントにも言えるかを、まず確認した。地名を単独で言い切った場合の（12a）の例や、その地名に助詞連続 mai＝duを後続させ、「～もゾある～mai du al、～もゾ見える～mai du miirarul」のような文を発音してもらった場合の（12b）の例を検討してみよう。この場合も、３種の型の区別をはっきりと観察することは困難である。

(12) 宮古島狩俣方言のアクセント（地名のアクセント）

(a) 単独言い切り形

［ａ型］	ja.a.ma	（八重山。）	pɨ.sa.]ra	（平良。）	fu.ja.]ma	（来間。）
［ｂ型］	mja.a.ku	（宮古。）	ja.mu.]tu	（大和。）	i.ra.]u	（伊良部。）
	u.kɨ.]na.a	（沖縄。）	i.ki.]ma	（池間。）		
［ｃ型］	ta.ra.]ma.	（多良間。）				

(b) ２つの韻律語からなる接続形

［ａ型］	ja.a.ma	ma. i. du…	（八重山もゾ～）
	fu.ja.]ma	ma.]i. du…	（来間もゾ～）
［ｂ型］	ja.mu.]tu	ma. i. du…	（大和もゾ～）
	mja.a.ku	ma.]i. du…	（宮古もゾ～）
	i.ki.]ma	ma.i. du…	（池間もゾ～）
［ｃ型］	ta.ra.]ma	ma.i. du…	（多良間もゾ～）

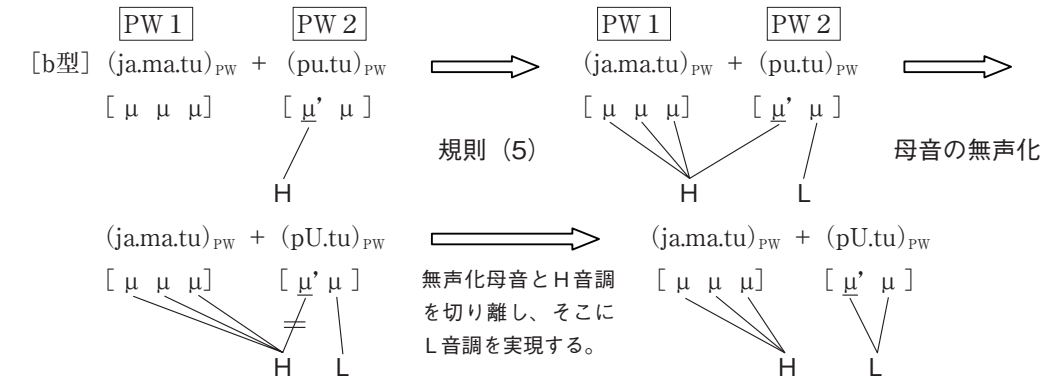
ところが、これらの地名を前部要素に持つ複合語（たとえば、jaama putu（八重山人）、jamutu fucu（大和言葉）のような語）を作成し、そのアクセント型を観察してみると、「八重山、平良、来間」はａ型、「大和、沖縄、宮古、伊良部、池間」はｂ型、「多良間」はｃ型であることが、はっきり判別できた。たとえば次の例のように、後部要素に「人」を持ってきた複合語では、その言い切り形においても、３種類の型の明瞭な区別が観察されることが確認できる。

（13）宮古島狩俣方言の三型アクセント（複合語から始まる韻律句その３）

［ａ型］	ja.a.ma　pu.tu	（八重山人。）		pi.sa.ra　pu.tu	（平良人。）
	fu.ja.ma　pu.tu	（来間人。）			
［ｂ型］	ja.mu.tu］　pu.tu	（大和人。）		u.ki.na.a］　pu.tu	（沖縄人。）
	mja.a.ku］　pu.tu	（宮古人。）		i.ra.u］　pu.tu	（伊良部人。）
	i.ki.ma］　pu.tu	（池間人。）			
［ｃ型］	ta.ra.]ma　pu.tu	（多良間人。）			

さて、このうちｂ型の下がり目が jamatu］putu（大和人）のようになり、期待される２つめの韻律語である putu 内部の次末モーラの位置に出現していないのは、putu の pu の部分の母音が、無声子音に挟まれて無声化したためであろう。「大和人。」を例にしてこのプロセスを図示すると、次のようになる。（以下本稿では、無声化母音を大文字で示すことで代用することとする。）

（14）宮古島狩俣方言のｂ型の下降位置のずれ（「大和人。」を例にして）



つまり、期待される×jamatu pu]tuのような型が出現していないのは、アクセントが置かれるはずのモーラ pu が、母音の無声化によりアクセントを担えなくなったために、その下がり目の位置が１モーラ分、前にずれたためだと考えられる。

さらにこれらの複合語を「～人の舟もゾ見える～putu nu Funi mai du miirarul」のような文の中に入れて、それを狩俣の話者に発音してもらった場合にも、次のような３種の型の違いが観察できた。この場合、$(\text{jaama})_{PW}$ $(\text{putu}=\text{nu})_{PW}$ $(\text{Funi})_{PW}$ $(\text{mai}=\text{du})_{PW}$のように、全部で４つの韻律語が連続して、ひとつの韻律句を形成していることになる。

（15）宮古島狩俣方言の三型アクセント（複合語から始まる韻律句その４）

［a 型］	ja.a.ma	pu.tu nu	Fu.]ni ma.i du…	（八重山人の舟も～）
	fu.ja.ma	pu.tu nu	Fu.]ni ma.i du…	（来間人の舟も～）
［b 型］	ja.mu.tu	pu.tu]nu	Fu.]ni ma.i du…	（大和人の舟も～）[19]
	mja.a.ku	pu.tu]nu	Fu.]ni ma.i du…	（宮古人の舟も～）
	i.ra.u	pu.tu]nu	Fu.]ni ma.i du…	（伊良部人の舟も～）
［c 型］	ta.ra.]ma	pu.tu nu	Fu.]ni ma.i du…	（多良間人の舟も～）

「八重山、来間」などａ型の地名から始まる複合語の場合は、後続する要素（この場合は「舟」に当たる部分）に、また、「大和、宮古、伊良部」などのｂ型の地名から始まる複合語の場合は、その複合語の後部要素の最終モーラに、さらに「多良間」というｃ型の地名から始まる複合語の場合は、その前部要素の地名部分に、それぞれピッチの下がり目が実現していることが分かる。

次の例は、「～言葉もゾ聞こえる ～munii mai du kikarul」のような文の中に入れて、それを狩俣の話者に発音してもらった場合である[20]。この場合も、３種類の型の区別が明瞭に出現した。この例でも、韻律句内部に３つの韻律語が連続していることになる。

（16）宮古島狩俣方言の三型アクセント（複合語から始まる韻律句その５）[21]

［a 型］	ja.a.ma	mu.ni. ɨ	ma.]i. du…	（八重山言葉もゾ～）
	pɨ.sa.ra	mu.ni. ɨ	ma.]i. du…	（平良言葉もゾ～）
	fu.ja.ma	mu.ni. ɨ	ma.]i. du…	（来間言葉もゾ～）
［b 型］	ja.mu.tu	mu.ni.]ɨ	ma.i. du…	（大和言葉もゾ～）
	mja.a.ku	mu.ni.]ɨ	ma.i. du…	（宮古言葉もゾ～）
	u.ki.na.a	mu.ni.]ɨ	ma.i. du…	（沖縄言葉もゾ～）
	i.ra.u	mu.ni.]ɨ	ma.i. du…	（伊良部言葉もゾ～）
	i.ki.ma	mu.ni.]ɨ	ma.i. du…	（池間言葉もゾ～）
［c 型］	ta.ra.]ma	mu.ni. ɨ	ma.i. du…	（多良間言葉もゾ～）

このように、特定の名詞を前部に持つ複合語を作成し、それを文頭に持ってきた韻律句の中でアクセントを観察してみることによって、狩俣方言にも、多良間島方言と同様、明瞭に区別される３種のアクセント型が出現する、ということが確認できた。

その狩俣方言の各型の韻律語に置かれたアクセントを示したものが、次の例である。これを見ると、そのａ型にはアクセントがなく[22]、ｂ型は２つ目の韻律語の次末モーラに、ｃ型は１つ目の韻律語の次末モーラに、それぞれアクセントが置かれていることが分かる。

（17）狩俣方言の三型アクセント（地名から始まる複合語の場合）の韻律構造

	PW 1		PW 2		PW 3		
［a 型］	$(\text{ja.a.ma})_{PW}$	+	$(\text{mu.ni. ɨ})_{PW}$	=	$(\text{ma. i=du})_{PW}$	…	（八重山言葉もゾ～）
［b 型］	$(\text{ja.mu.tu})_{PW}$	+	$(\text{mu.ni.'ɨ})_{PW}$	=	$(\text{ma. i=du})_{PW}$	…	（大和言葉もゾ～）

［c 型］(ta.ra.’ ma)$_{PW}$　+　(mu.ni. ɨ)$_{PW}$　=　(ma. i＝du)$_{PW}$ …　（多良間言葉もゾ～）

以下は、そのうちのｂ型とｃ型のアクセントの実現を、（11）にしたがって示したものである。どちらの型の場合にも、それぞれアクセントの指定された韻律語の次末モーラに、そのアクセントが実現していることが分かる。

（18）狩俣方言の韻律構造とｂ型、ｃ型のアクセントの実現

PW 1　　PW 2　　PW 3

［b型］(ja.mu.tu)$_{PW}$　+　(mu. ni. ’ ɨ)$_{PW}$　=　(ma. i.=du)$_{PW}$ …　（大和言葉もゾ～）

［μ　μ　μ］　　［μ　μ’　μ］　　［μ　μ　μ］

H

［c型］(ta.　ra.’ ma)$_{PW}$　+　(mu. ni.　ɨ)$_{PW}$　=　(ma.i. = du)$_{PW}$ …　（多良間言葉もゾ～）

［μ　μ’　μ］　　［μ　μ　μ］　　［μ　μ　μ］

H

以上、多良間島方言でも、宮古島の狩俣方言でも、（本稿では韻律語（Prosodic Word）と呼ぶ）共通した韻律上の単位が存在し、それが両方言のアクセントの位置を決定する際に重要な役割を果たしていることを見てきた。また両方言は、そのｂ型とｃ型のアクセントは、各韻律語の「次末モーラに実現する」という共通点があることも見てきた。

２．３　韻律語の構造 ― １モーラの助詞は韻律語を形成できない

さてここで重要なことは、どちらの方言でも、mai（も）や kara＝du（奪格助詞＝焦点標識）のような（全体として）２モーラ以上の助詞や助詞連続は、それ自体で独立した韻律語を形成できるのに対して、属格の助詞 nu は、それだけでは独立した韻律語を形成できず、前の名詞（あるいは複合語の語根）といっしょになってひとつの韻律語を形成する、という点である[23]。多良間島に関しては、松森（2014、近刊）においてすでにこの点を論じたので、以下は狩俣方言の例を使用しながら、このことを見ていくこととする。次の（19）は、狩俣方言のａ型、ｂ型、ｃ型の名詞を、「～もいる ～mai du ul 」という文の中に入れて発音してもらった際の文節部分のアクセント型を示したものである。

（19）宮古島狩俣方言のアクセント（その２）

［ａ型］tu.zɨ　　ma.]i　du …　（妻も～）
［ｂ型］mi.du.m　　ma.]i　du …　（女も～）
［ｃ型］ga.a.]na　　ma.i　du …　（アヒルも～）

多良間島と異なり狩俣方言では、この環境ではａ型とｂ型が中和してしまい、同じアクセント

型となって出現する。同様に、同じ名詞を「～の声も聞こえる ～nu kui mai du kikarul」という文に入れて発音してもらった場合にも、a 型と b 型の違いは明瞭にはならない。

(20) 宮古島狩俣方言のアクセント（その３）

［a 型］tu.zɨ　nu　　ku.］i　　ma.i　du …　　（妻の声も～）
［b 型］mi.du.m　nu　　ku.］i　　ma.i　du …　　（女の声も～）
［c 型］ga.a.na］　nu　　ku.i　　ma.i　du …　　（アヒルの声も～）

さて、ここで特に注目されるのは、c 型の持つ下がり目の位置である。(19) の場合には、その下がり目は gaa]naという名詞の次末モーラに出現するのに対して、(20) の場合は、その下がり目が、gaana] nu のように、同じ名詞の最終モーラに実現している。これは、属格助詞 nu が、前の名詞といっしょになって一つの韻律語を形成するために起こったと思われる現象である。

以下に、(19) と (20) の c 型の構造の違いを比較してみよう。この場合、そのアクセントは、それぞれの韻律語の次末モーラに出現するために、その下がり目の位置が異なってくると考えられる。

(21) 宮古島狩俣方言の韻律構造と c 型のアクセント位置

［c 型］(ga. a. ’ na)$_{PW}$　+ (= ma. i = du)$_{PW}$ …　　（アヒルも～）
［μ　μ’　μ］　　［μ　μ　μ］
H

［c 型］(ga. a. na’　nu)$_{PW}$ + (ku. i)$_{PW}$ (= ma. i = du)$_{PW}$ …　　（アヒルの声も～）
［μ　μ　μ’　μ］　　［μ　μ］　［μ　μ　μ］
H

すでに多良間方言（松森2014）、与那覇方言（松森 近刊）において指摘したように、「韻律語は２モーラ以上でなければ形成できない」という制約が、宮古諸島の諸方言に存在する。（注23参照）このため１モーラの助詞は、前の名詞や複合語の語根といっしょになってひとつの韻律語を形成する。

同じような事情によってアクセントの位置が変わってくるという現象は、b 型にも観察される。すでに、「麦畑からゾ～」「豆畑からゾ～」の構造は (mugɨ)$_{PW}$+ (pa’ri)$_{PW}$ (kara = du)$_{PW}$ …、(mami)$_{PW}$+ (pa’ri)$_{PW}$ (kara = du)$_{PW}$ … のようになり、そのピッチの下がり目は、韻律句内部の２つ目の韻律語の次末モーラ（つまりこの場合はpariのpaの部分）に出現することは、(10) で見てきた。ところが、それを今度は「～畑の後ろにある ～bari nu cjibi ndu al」のような文に入れてみると、その下がり目の位置が、次のように変わってくる。

(22) 宮古島狩俣方言の三型アクセント（複合語から始まる韻律句その４）

［a 型］ku.u.su　＋　ba.ri ＝nu　cji.bi］　＝n＝du …　（唐辛子畑の後ろに～）
［b 型］mu.gɨ　＋　ba.ri］＝nu　cji.bi］　＝n＝du …　（麦畑の後ろに～）
［c 型］ta.ma.］na　＋　ba.ri ＝nu　cji.bi］　＝n＝du …　（キャベツ畑の後ろに～）

これは、韻律語形成の違いによる。

この方言の韻律構造を、特にb型のアクセントの位置に注目してみてみると、属格助詞 nu が、直前の語根（複合語の後部要素）といっしょになってひとつの韻律語を形成していることが分かる。

(23) 宮古島狩俣方言の３つの型の韻律構造とアクセントの位置

	PW 1		PW 2	PW 3		
［a 型］	(ku.u.su)$_{PW}$	＋	(pa.ri ＝nu)$_{PW}$	(cji.bi ＝n＝du)$_{PW}$	…	（唐辛子畑の後ろにゾ～）
［b 型］	(mu.gɨ)$_{PW}$	＋	(pa.ri’＝nu)$_{PW}$	(cji.bi ＝n＝du)$_{PW}$	…	（麦畑の後ろにゾ～）
［c 型］	(ta.ma.’na)$_{PW}$	＋	(pa.ri ＝nu)$_{PW}$	(cji.bi ＝n＝du)$_{PW}$	…	（キャベツ畑の後ろにゾ～）

ここで（10）と（23）のb型の韻律構造の違いを次のように比較してみると、「麦畑からゾ～」と「麦畑の後ろにゾ～」の場合、なぜ、その下がり目の位置が違うのかが分かる。

(24) 宮古島狩俣方言のb型のアクセント位置比較

a．(mu.gɨ)$_{PW}$　＋　(pa.’ri)$_{PW}$　(ka.ra＝du)$_{PW}$ …　（麦畑からゾ～）
b．(mu.gɨ)$_{PW}$　＋　(pa.ri.’＝nu)$_{PW}$　(cji.bi ＝n＝du)$_{PW}$ …　（麦畑の後ろにゾ～）

b型のアクセントは、どちらの場合にも、その韻律句内部の２つ目の韻律語の次末モーラに出現している。しかし「畑 pari」という語に注目してみた場合、(24a) と (24b) とでは、そのアクセントの出現位置が違う。(24a) の場合は「畑 pari」の内部に、(24b) の場合は「畑 pari」の最終モーラ直後に、そのアクセントが置かれるからである。このような違いは、１モーラの助詞である属格の nu が、それが付加している語根といっしょに２つ目の韻律語内に取り入れられているために生じる。このことを、韻律構造によって図示したのが、(25) である。

(25) 宮古島狩俣方言の韻律構造とｂ型のアクセント位置

	PW 1	PW 2	PW 3	
［ｂ型］	(mu. gi)$_{PW}$	+ (pa.’ ri)$_{PW}$	(ka. ra = du)$_{PW}$…	（麦畑からゾ～）
	［μ μ］	［μ’ μ］	［μ μ μ］	
		H		
［ｂ型］	(mu. gi)$_{PW}$	+ (pa. ri.’ =nu)$_{PW}$	(cji. bi =n =du)$_{PW}$…	（麦畑の後ろに～）
	［μ μ］	［μ μ’ μ］	［μ μ μ μ］	
		H		

五十嵐（2015）、Igarashi et al.（forthcoming）、松森（2013b、2014、近刊）などの先行研究においては、多良間島方言、池間島方言、そして宮古島の与那覇方言という、宮古諸島の３つの方言のいずれにおいても、そのアクセント位置の算出に当たって、このようにモーラより大きい韻律上の単位が機能していることが分かっている。本稿で「韻律語」と呼ぶことにしたこの韻律上の単位は、次のように、さまざまな形態的要素から成り立っていることが、これまでに分かっている[24)]。

(26) 宮古諸島の韻律語（PW）を構成する要素

a．名詞ひとつ	(ku.u.su)$_{PW}$	「唐辛子」
b．名詞＋１モーラ助詞（属格助詞の nu など）	(ku.u.su＝nu)$_{PW}$	「唐辛子の」
c．複合語の語根（前部要素、後部要素）	(ku.u.su)$_{PW}$+ (pa.ri)$_{PW}$	「唐辛子畑」
d．複合語の語根（後部要素）＋１モーラ助詞（属格助詞の nu など）	(ku.u.su)$_{PW}$+ (pa.ri＝nu)$_{PW}$	「唐辛子畑の」
e．２モーラ以上の助詞	＝ (ka.ra)$_{PW}$	「から」
f．２モーラ以上の助詞連続	＝ (ka.ra＝du)$_{PW}$	「からゾ」

どの方言においても、属格助詞 nu や焦点標識の du 等の１モーラの助詞は、それひとつで独立した韻律語を形成できず、付加した名詞、語根、助詞といっしょになってひとつの韻律語を形成する。つまり、宮古諸島の型の区別のあるすべての方言に共通して、「１モーラ語は韻律語を形成できない」という性質が見られるのである。

次節では、宮古諸島と同じく八重山諸島でも、この「韻律語」という単位が、アクセントの位置を決定する際の重要な単位として機能していることを見ていく。

３．八重山諸島の三型アクセント体系の記述―「韻律語」を使って

さて、以上、宮古諸島の２つの方言の考察から、「韻律語」という単位を想定し、それを韻律句の中に３つ並べた文を作成して調査すれば、明瞭な３つの型の区別が観察できることを見てき

た。そこで、宮古諸島で調査したセンテンスと同じような文を発音してもらう調査を、八重山諸島においても行った[25]。その結果、これまで二型アクセントであると認識・報告されてきた八重山諸島の諸方言のうち、黒島、小浜島、西表島の古見（こみ）という集落に、明瞭な３型アクセントが観察されることが、あらたに分かった[26]。

３．１　黒島方言の三型アクセント体系

平山ほか（1967）は、黒島のアクセント体系に「平板型」と「頭高型」という２種の型しか認めていない。そのうち「平板型」とされているものの所属語彙には「牛 ʔuʃi、網 ʔan、鼻 pana、花 pana、腕 ʔudi、山 jama、鳥 tur、犬 ʔin」などがあり、「頭高型」の所属語彙には「臼 ʔuʃi、猿 sar、箸 paʃi、婿 muku、声 kui、蔭 hai」などが含まれている（平山輝男ほか 1967：49-50）[27]。

しかし、狩俣で試みたと同様、地名から始まる複合語を文頭に持つセンテンスを作成して、その韻律句内部の音調型を調査してみると、この黒島方言も「三型アクセント体系」であることが判明した[28]。

まず結論から先に述べると、調査した地名のうち「宮古、小浜、西表、波照間」はａ型、「大和、沖縄、アメリカ」はｂ型、「多良間、鳩間、竹富」はｃ型のアクセントを持つ[29]。これらの地名をもとにして、狩俣方言の調査で作成したような複合語を作成し、その型を観察すると、明瞭に区別される３種の型の区別が出現した。

まず黒島方言では、複合語の単独言い切り形に明瞭な３種の型の区別が観察できた。その３種のうちのａ型にはどこにも下がり目が出現せず、ｂ型には２つ目の韻律語に下がり目が出現し、ｃ型は最初の韻律語内部に下がり目が出現する。

(27) 黒島方言の三型アクセント体系（複合語から始まる韻律句その１）

［ａ型］	me.e.ku　pu.su	（宮古人。）	ku.ba.ma pu.su	（小浜人。）
	i.ri.mu.ti　pu.su	（西表人。）	pa.ti.ru.ma pu.su	（波照間人。）
［ｂ型］	ja.ma.tu］pu.su	（大和人。）[30]	Fu.ki.na.a］pu.su	（沖縄人。）
	a.me.ri.ka］pu.su	（アメリカ人。）		
［ｃ型］	ta.ra.]ma pu.su	（多良間人。）	pa.tu.]ma pu.su	（鳩間人。）
	ta.ki.]du.n　pu.su	（竹富人。）		

この場合、それぞれの韻律句内部に韻律語は２つしか並んでいない。それにもかかわらず、３種の型の区別は明瞭に出現した。しかしながら、これら複合語に主格の nu を付けて「～人がいる～pusu nu bun」というセンテンスの中に入れて発音してもらうと、(27) にみられた３種類の型の区別のうちの２種類しか観察できなくなってしまう。この場合は、［ａ型］と［ｂ型］の型の違いが中和して、次のように同じ型で出現した[31]。

(28) 黒島方言のアクセント体系（複合語から始まる韻律句その２）

［ａ型］	ku.ba.ma	pu.su］nu …	（小浜人が～）
	i.ri.mu.ti	pu.su］nu …	（西表人が～）

	pa.ti.ru.ma	pu.su］nu …	（波照間人が～）
［b 型］	ja.ma.tu	pu.su］nu …	（大和人が～）
	Fu.ki.na.a	pu.su］nu …	（沖縄人が～）
［c 型］	ta.ra.]ma	pu.su nu …	（多良間人が～）
	pa.tu.]ma	pu.su nu …	（鳩間人が～）
	ta.ki.]du.n	pu.su nu …	（竹富人が～）[32]

このことは、韻律語が２つしか並ばないような文例では、３種の区別を常に確実に導き出せるとは限らないことを示唆している。

一方、韻律句の中の韻律語の数が３つ以上になった場合には、確実に３種類の型の区別を観察することができる。たとえば、（27）で見た複合語に、属格のnuを後続させて「～人の声」のような句を作って発音してもらうと、３つの型の明瞭な違いが出現した。まず、次の（29）の例は、言い切り形の場合である。

（29）黒島方言の三型アクセント体系（複合語から始まる韻律句その３）

［a 型］	me.e.ku	pu.su	nu］	ku.i	（宮古人の声。）
	ku.ba.ma	pu.su	nu］	ku.i	（小浜人の声。）
	i.ri.mu.ti	pu.su	nu］	ku.i	（西表人の声。）
	pa.ti.ru.ma	pu.su	nu］	ku.i	（波照間人の声。）
［b 型］	ja.ma.tu	pu.su］	nu	ku.i	（大和人の声。）
	Fu.ki.na.a	pu.su］	nu	ku.i	（沖縄人の声。）
	a.me.ri.ka	pu.su］	nu	ku.i	（アメリカ人の声。）
［c 型］	ta.ra.］ ma	pu.su	nu	ku.i	（多良間人の声。）
	pa.tu.］ ma	pu.su	nu	ku.i	（鳩間人の声。）
	ta.ki.］ du.n	pu.su	nu	ku.i	（竹富人の声。）

また次の例は接続形の場合で、同じ複合語を「～の声が聞こえる ～nu kui nu sikarirun」のような文の中に入れて発話してもらったものである。ここでも３つの型の違いは、すべてはっきりと聞き取ることができた。

（30）黒島方言の三型アクセント体系（複合語から始まる韻律句その４）

［a 型］	me.e.ku	pu.su	nu	ku.i ］nu …	（宮古人の声が～）
	ku.ba.ma	pu.su	nu	ku.i ］nu …	（小浜人の声が～）
	i.ri.mu.ti	pu.su	nu	ku.i ］nu …	（西表人の声が～）
	pa.ti.ru.ma	pu.su	nu	ku.i ］nu …	（波照間人の声が～）
［b 型］	ja.ma.tu	pu.su ］	nu	ku.i ］nu …	（大和人の声が～）
	Fu.ki.na.a	pu.su ］	nu	ku.i ］nu …	（沖縄人の声が～）
	a.me.ri.ka	pu.su ］	nu	ku.i ］nu …	（アメリカ人の声が～）

［c 型］	ta.ra.]ma	pu.su	nu	ku.i ］nu	…	（多良間人の声が～）
	pa.tu.]ma	pu.su	nu	ku.i ］nu	…	（鳩間人の声が～）
	ta.ki.]du.n	pu.su	nu	ku.i ］nu	…	（竹富人の声が～）

同様に、次の例は「～人の舟が見える ～pusu nu Funi nu mirarirun」のようなセンテンスである。ここでも３種類の型の区別が、その下がり目の位置の違いによってはっきりと聞き取れる。

（31）黒島方言の三型アクセント体系（複合語から始まる韻律句その５）

［a 型］	me.e.ku	pu.su	nu	Fu.ni ］nu	…	（宮古人の舟が～）
	ku.ba.ma	pu.su	nu	Fu.ni ］nu	…	（小浜人の舟が～）
	i.ri.mu.ti	pu.su	nu	Fu.ni ］nu	…	（西表人の舟が～）
	pa.ti.ru.ma	pu.su	nu	Fu.ni ］nu	…	（波照間人の舟が～）
［b 型］	ja.ma.tu	pu.su ］	nu	Fu.ni ］nu	…	（大和人の舟が～）
	Fu.ki.na.a	pu.su ］	nu	Fu.ni ］nu	…	（沖縄人の舟が～）
［c 型］	ta.ra.]ma	pu.su	nu	Fu.ni ］nu	…	（多良間人の舟が～）
	pa.tu.]ma	pu.su	nu	Funi ］nu	…	（鳩間人の舟が～）
	ta.ki.]du.n	pu.su	nu	Funi ］nu	…	（竹富人の舟が～）

この例でも、「～人の舟が」の部分に、$(\text{meeku})_{PW}$ $(\text{pusu}=\text{nu})_{PW}$ $(\text{Funi}=\text{nu})_{PW}$のように、３つの韻律語が並んでいる。

つまり、韻律句内部の韻律語が、$(\text{meeku})_{PW}$ $(\text{pusu}=\text{nu})_{PW}$ $(\text{kui})_{PW}$、あるいは $(\text{meeku})_{PW}$ $(\text{pusu}=\text{nu})_{PW}$ $(\text{Funi}=\text{nu})_{PW}$のように３つ以上ある場合には、言い切り形でも、接続形でも、３種類の型の区別が明瞭に出現することが分かった。このようにして、この黒島方言も三型アクセント体系を持つことが判明した。

また、この方言は、多良間島や宮古島狩俣方言と非常によく似た、次のような仕組みを持っていることも明らかになった。

（32）黒島方言アクセントの仕組み

（a）その体系内の３種の型のアクセントは、ピッチの下降の有無とその位置の違いによって区別される。

（b）それぞれの型のアクセントは、次のように出現する。

〈a 型〉下がり目がない

〈b 型〉２つめの韻律語（PW）に出現

〈c 型〉最初の韻律語（PW）に出現

（c）下降は、原則的にそれぞれのPWの次末モーラに出現する。

また、その具体的な音調実現にかかわる規則も、多良間島方言の（5）と同じ、次のようなものである。

(33) 黒島方言の音調付与規則

(a) H音調付与規則

韻律句の最初のモーラから、アクセントのあるモーラまでを高くする。

(b) L音調付与規則

アクセントを持つモーラの直後のモーラから、韻律句の最後のモーラまでを低くする。

以下は、黒島方言の3つの PW の韻律構造と、それぞれの型のアクセントの位置を示している。

(34) 黒島方言の3種類の型の韻律構造とアクセント

	PW 1		PW 2	PW 3		
［a 型］	(me.e.ku)$_{PW}$	+	(pu.su＝nu)$_{PW}$	(Fu.ni＝nu)$_{PW}$	…	(宮古人の舟が～)
［b 型］	(ja.ma.tu)$_{PW}$	+	(pu.su'＝nu)$_{PW}$	(Fu.ni＝nu)$_{PW}$	…	(大和人の舟が～)
［c 型］	(ta.ra.'ma)$_{PW}$	+	(pu.su＝nu)$_{PW}$	(Fu.ni＝nu)$_{PW}$	…	(多良間人の舟が～)

この黒島方言のb型とc型の韻律構造と、そのアクセントの位置を図示したのが、(35) である。多良間島や狩俣方言と同様、黒島方言でも、属格の助詞 nu が、それが付加した名詞とともにひとつの韻律語を形成する。このように捉えることによって、このb型のアクセントの位置が正しく予測されることが、ここから分かる。

(35) 黒島方言の韻律構造とb型とc型のアクセントの実現

	PW 1		PW 2	PW 3		
［b 型］	(ja. ma. tu)$_{PW}$	+	(pu. su.' = nu)$_{PW}$	(Fu. ni =nu)$_{PW}$	…	(大和人の舟が～)
	［μ μ μ］		［μ μ' μ］	［μ μ μ］		
			H			
［c 型］	(ta. ra.' ma)$_{PW}$	+	(pu. su = nu)$_{PW}$	(Fu. ni =nu)$_{PW}$	…	(多良間人の舟が～)
	［μ μ' μ］		［μ μ μ］	［μ μ μ］		
	H					

以上、八重山諸島の一方言である黒島方言にも、多良間島、与那覇、狩俣などの宮古諸島の諸方言と同じような韻律上の単位が認められ、三型アクセント体系の存在が確認できた。

3．2　小浜島方言の三型アクセント体系

さて、同じ八重山諸島の小浜島方言においても、韻律語を想定して調査をすると、明瞭な3つの型の区別が観察されることが分かった。ただし本稿における報告は、2014年3月に行った1回の調査結果に基づくもので、まだ小浜島の体系の仕組みの全貌の解明には至ってはいない[33]。しかしその調査で収集できたデータが、「三型アクセント体系」の存在を強く示唆することが判明

したため、ここにそのデータの一部を記述・報告しておく必要があると考え、公表することとした。したがってここでは、その簡単な記述報告のみにとどめ、アクセントの仕組みや音調規則についての考察は、別途、行うこととする。

平山輝男ほか（1967：56）は、小浜島のアクセントについて、「頭高型」と「尾高型」の２種の型しか認めていない。その「頭高型」の所属語には[34]「牛 ʔusU、魚 ʔitsU、道 mitsU、皿 sara、石 iʃI、鼻 pANA、犬 ʔinu、山 jama、毛 ki:、葉 pa:」などがあり、「尾高型」の所属語には「針 pari、船 FUNi、婿 muku、花 pANA、臼 ʔusU、声 kui、蔭 kai、竿 so:、田 ta:、木 ki:」などがある[35]。

ところがこの度、宮古諸島で調査したものと同様な文を使って調査をしてみると、小浜島にも、３種類のアクセント型の区別が存在することが分かった。

結論から述べると、この方言では a 型に「gusu（唐辛子）、biran（にら）、akkon（さつま芋）、suppuru（冬瓜）」、b 型に「mui（麦）、mami（豆）、guma（ゴマ）」、c 型に「sjinzja（砂糖黍）、gooja（苦瓜）、nabeera（へちま）、tamanaa（キャベツ）」という語が所属する。これらの名詞を前部要素に持ってきて「～畑」のような複合語を作り、それを発音してもらうことにより、３つの型の区別を明瞭に聞き取ることができた。

まず次の例は、それらの複合語を単独で言い切った場合の音調型である。なおこの方言では、ピッチの下降の位置だけでなく、その上昇の位置も有意味な場合があるので、以下、そのピッチの下がり目の位置に ］、ピッチの上がり目の位置に ［ を付けて示すことにする。

(36) 小浜島方言の三型アクセント体系（複合語から始まる韻律句その１）

［a 型］	gu.su]	ha.ta.ki	（唐辛子畑。）	bi.ra.] n	ha.ta.ki	（にら畑。）
	a.k.]ko.n	ha.ta.ki	（芋畑。）			
［b 型］	mu.]i	ha.ta.[ki	（麦畑。）	ma.]mi	ha.ta.[ki	（豆畑。）
	gu.]ma	ha.ta.[ki	（胡麻畑。）			
［c 型］	sji.n.[zja]	ha.ta.ki	（砂糖黍畑。）	go.o.[ja]	ha.ta.ki	（苦瓜畑。）
	na.be.e.[ra]	ha.ta.ki	（へちま畑。）	ta.ma.[na.a]	ha.ta.ki	（キャベツ畑。）

この方言の３種の型の違いは、その複合語を先頭にして、その後に２モーラ以上の助詞あるいは助詞連続を後続させ、「～畑からゾ来た ～hataki kara du kitaru」という文の中で発音してもらうことによって、いっそう明瞭に観察できた。

(37) 小浜島方言の三型アクセント体系（複合語から始まる韻律句その２）[36]

［a 型］	bi.ra.]n	ha.ta.ki	ka.ra. [du…	（にら畑からゾ～）
	a.k.]ko.n	ha.ta.ki	ka.ra. [du…	（芋畑からゾ～）
	gu.su]	ha.ta.ki	ka.ra. [du …	（唐辛子畑からゾ～）
［b 型］	ma.]mi	ha.ta.[ki]	ka.ra. [du…	（豆畑からゾ～）
	mu.]i	ha.ta.[ki]	ka.ra. [du…	（麦畑からゾ～）
	gu.]ma	ha.ta.[ki]	ka.ra. [du…	（ゴマ畑からゾ～）

［c 型］	sji.n.［zja］	ha.ta.ki	ka.ra.［du…	（砂糖黍畑からゾ～）
	go.o.［ja］	ha.ta.ki	ka.ra.［du…	（苦瓜畑からゾ～）
	na.be.e.［ra］	ha.ta.ki	ka.ra.［du…	（へちま畑からゾ～）
	ta.ma.［na.a］	ha.ta.ki	ka.ra.［du…	（キャベツ畑からゾ～）

同様に、「～畑へゾ行く ～hataki ngee du haru」のような文の中で発音してもらった場合にも、明瞭な３種の型の区別が観察された。

(38) 小浜島方言の三型アクセント体系（複合語から始まる韻律句その３）

［a 型］	bi.ra.］n	ha.ta.ki	n.ge.e. du…	（にら畑へゾ～）
	a.k.］ko.n	ha.ta.ki	n.ge.e. du…	（芋畑へゾ～）
	gu.su］	ha.ta.ki	n.ge.e. du…	（唐辛子畑へゾ～）
［b 型］	ma.］mi	ha.ta.［ki］	n.ge.e. du…	（豆畑へゾ～）
	mu.］i	ha.ta.［ki］	n.ge.e. du…	（麦畑へゾ～）
	gu.］ma	ha.ta.［ki］	n.ge.e. du…	（ゴマ畑へゾ～）
［c 型］	sji.n.［zja］	ha.ta.ki	n.ge.e. du…	（砂糖黍畑へゾ～）
	go.o.［ja］	ha.ta.ki	n.ge.e. du…	（苦瓜畑へゾ～）
	na.be.e.［ra］	ha.ta.ki	n.ge.e. du…	（へちま畑へゾ～）
	ta.ma.［na.a］	ha.ta.ki	n.ge.e. du…	（キャベツ畑へゾ～）

（後述する古見方言や波照間島方言と同様）小浜島では、ａ型は最初の韻律語（複合語前部要素）内の前から２つ目のモーラで下がり目が生じている。これに対してｂ型は、２つ目の韻律語（この場合は複合語後部要素）の最後のモーラだけが高くなる。一方ｃ型は、最初の韻律語（複合語前部要素）の最後の音節だけが高くなる。

本稿では、この方言のアクセントを昇り核の一種と考えて「 という記号で示し、次のような韻律構造を提案する。

(39) 小浜島の３種類の型の韻律構造とアクセント（試案）

	PW 1		PW 2	PW 3		
［a 型］	(bi.ra.n)$_{PW}$	＋	(ha.ta.ki)$_{PW}$	(ka.ra＝ du)$_{PW}$	…	（韮畑からゾ～）
［b 型］	(ma.mi)$_{PW}$	＋	(ha.ta.「ki)$_{PW}$	(ka.ra＝ du)$_{PW}$	…	（豆畑からゾ～）
［c 型］	(sji.n.「zja)$_{PW}$	＋	(ha.ta.ki)$_{PW}$	(ka.ra＝ du)$_{PW}$	…	（砂糖黍畑からゾ～）

ただし（39）の解釈は試案であり、今後、必要な修正を加えていかなければならないものである。少なくとも本稿では、この小浜島方言においても、モーラや音節より大きい韻律上の単位がそのアクセント体系の記述において必要となること、そして、明瞭な三型アクセント体系が存在することを、明らかにすることができた。

３．３　西表島古見方言の三型アクセント体系

前節の小浜島方言と同様に、ａ型の最初の韻律語内部の前から２つ目のモーラ直後にはっきりした下がり目が出現する方言は、八重山諸島に数多く存在する[37]。西表島東部の古くからの集落である古見の方言は、そのうちの代表的なものである。

この古見方言の体系も、平山ほか（1967）によって取り上げられて記述されている。それを参照すると、その２モーラ名詞には、やはり２種類の型しかないと記述されており、その一方の型には「鼻 pana、橋 pasU」が所属し、もう一方には「花 pana、舟 Funi、婿 muku」が所属している（平山ほか1967：47）[38]。

しかし、複合語を使って調査を行った結果、この方言も三型アクセント体系である可能性が高くなった[39]。次の例を検討しよう。まず分析結果から先に述べると、「唐辛子、さつま芋」はａ型、「豆、瓜」はｂ型、「砂糖黍、苦瓜、キャベツ、ピーナツ」はｃ型の名詞である。まず、それらの名詞に主格助詞 nu と焦点標識 du が後続した接続形「～がゾある ～nu du aru」では、ｂ型とｃ型の違いが中和してしまう。したがって、この条件のもとでは、２つの型の違いしか観察することができない。

（40）西表島古見方言のアクセント（その１）

［ａ型］	gu.su］	nu	du	…	（唐辛子がゾ～）
	a.k.］ku.n	nu	du	…	（さつま芋がゾ～）
［ｂ型］	ma.a.mi	nu	du	…	（豆がゾ～）
	u.ru	nu	du	…	（瓜がゾ～）
［ｃ型］	su.n.za	nu	du	…	（砂糖黍がゾ～）
	go.o.ja	nu	du	…	（苦瓜がゾ～）
	ta.ma.na	nu	du	…	（キャベツがゾ～）

しかしこれらの名詞を先頭にした複合語を作成して発音してもらうと、次の例に見られるように、３種類の型の違いが出現した。

（41）西表島古見方言のアクセント（複合語から始まる韻律句その１）

［ａ型］	gu.su］	pa. ta. gi	（唐辛子畑。）
	a.k.］ku.n	pa. ta. gi	（さつま芋畑。）
［ｂ型］	ma.mi	pa. ta. gi	（豆畑。）
	u.ru	pa. ta. gi	（瓜畑。）
［ｃ型］	su.n.za	pa.］ta.gi	（砂糖黍畑。）
	go.o.ja	pa.］ta.gi	（苦瓜畑。）
	ta.ma.na	pa.］ta.gi	（キャベツ畑。）
	zɨ. ɨ. ma. mi	pa.］ta.gi	（ピーナツ畑。）

そのうちのａ型は、（先述の小浜島方言と同様に）語頭から数えて２つ目のモーラの直後に下

がり目が出現する。これに対してｂ型は、韻律句全体を通してどこにも急激な下がり目や上がり目がない平坦な型（以下、これを仮に「平板型」と呼んで議論する。）で出現した。これは、これまで本稿で見てきた同じ八重山諸島の黒島や小浜島とは異なる顕著な特徴である。またｃ型は、最初の韻律語直後のモーラに下がり目が出現するような型で出現した。

ところが、これらの複合語をセンテンスに入れて発話してもらうと、なぜか（少なくとも私の調査した２名の話者では）次に見られるように、２つの型が合流して、同じ型で出現した。（この場合、ｂ型とｃ型が合流する傾向にあった。）次の（42）の例は、「～畑から来た ～patagi kara kita」、（43）の例は「～畑へ行く～patagi ngai paru」という文を発話してもらった際の、最初の韻律句部分の音調型を示している。

（42）西表島古見方言のアクセント（複合語から始まる韻律句その２）

［ａ型］	gu.su]	pa. ta. gi	ka.ra…	（唐辛子畑から～）
	a.k.]ku.n	pa. ta. gi	ka.ra…	（さつま芋畑から～）
［ｂ型］	ma.mi	pa.]ta. gi	ka.ra…	（豆畑から～）
	u.ru	pa.]ta. gi	ka.ra…	（瓜畑から～）
［ｃ型］	su.n.za	pa.]ta.gi	ka.ra…	（砂糖黍畑から～）
	go.o.ja	pa.]ta.gi	ka.ra…	（苦瓜畑から～）
	ta.ma.na	pa.]ta.gi	ka.ra…	（キャベツ畑から～）
	zɨ. ɨ. ma. mi	pa.]ta.gi	ka.ra…	（ピーナツ畑から～）

（43）西表島古見方言のアクセント（複合語から始まる韻律句その３）

［ａ型］	gu.su]	pa. ta. gi	n.ga.i…	（唐辛子畑へ～）
	a.k.]ku.n	pa. ta. gi	n.ga.i…	（さつま芋畑へ～）
［ｂ型］	ma. mi	pa.]ta. gi	n.ga.i…	（豆畑へ～）
	u.ru	pa.]ta. gi	n.ga.i…	（瓜畑へ～）
［ｃ型］	su.n.za	pa.]ta. gi	n.ga.i…	（砂糖黍畑へ～）
	go.o.ja	pa.]ta. gi	n.ga.i…	（苦瓜畑へ～）
	ta.ma.na	pa.]ta. gi	n.ga.i…	（キャベツ畑へ～）
	zɨ. ɨ. ma. mi	pa.]ta. gi	n.ga.i…	（ピーナツ畑へ～）

これらはすべて、$(\text{gusu})_{PW}$ $(\text{patagi})_{PW}$ $(\text{kara})_{PW}$のように、３つの韻律語から成り立つ韻律句である。それにもかかわらず３つの型の区別は明瞭にはならず、ｂ型とｃ型が中和して同じ型となって出現したのはなぜだろうか。いずれにせよ、少なくとも「～畑」という複合語では、三型アクセント体系の存在は、完全には確認できないことが分かった。

これに対して、地名を前部要素に持つ「大和人」、「宮古言葉」などの複合語の場合には、３つのアクセント型の区別を、より明瞭に確認することができた。分析結果から先に述べれば、この古見方言では、「宮古、小浜、波照間、西表」はａ型、「大和、沖縄」はｂ型、「多良間、黒島、鳩間、竹富」はｃ型に所属する地名である。まず、これらを単独で発音してもらった場合、およ

び、それに主格の助詞を付け「～がゾ見える ～nudu mirariru」のように発音してもらった場合の型を示すと、次のようになる。

(44) 西表島古見方言のアクセント（その２）

(a) 単独言い切り形

［a 型］	mja.a.]ku ～ me.e.]ku	（宮古。）	pa.te.]ru. ma	（波照間。）
	ku.pa.]ma ～ ku.ba.]ma	（小浜。）	i.rju.]mu.ti	（西表。）
［b 型］	ja.ma.[tu	（大和。）	u.ki.[na	（沖縄。）
［c 型］	ta.ra.[ma	（多良間。）	fu.su.[ma ～ pu.su.[ma	（黒島。）
	pa.tu.[ma	（鳩間。）	ta.ki.[du.n	（竹富。）

(b) 助詞連続 nu＝du を後続させた場合の接続形

［a 型］	mja.a.]ku nu du…	（宮古がゾ～）	ku.pa.]ma nu du…	（小浜がゾ～）
	i.rju.]mu.ti nu du…	（西表がゾ～）		
［b 型］	ja.ma. tu nu［du…	（大和がゾ～）	u.ki. na.a nu［du…	（沖縄がゾ～）
［c 型］	ta.ra.ma nu［du…	（多良間がゾ～）	fu.su.ma nu［du…	（黒島がゾ～）
	pa.tu.ma nu［du…	（鳩間がゾ～）	ta.ki.du.n nu［du…	（竹富がゾ～）

一見して分かるように、(44a) や (44b) のような条件下では、そこに３つの型の区別を見出すことは困難である。これに対して、この地名を前部要素にして「～人」のような複合語を作って発音してもらうと、(44) の例とはうってかわって、３つの型の区別がはっきりと出現した。

(45) 西表島古見方言の三型アクセント体系（複合語から始まる韻律句その４）

［a 型］	mja.a.]ku	p i. tu	（宮古人。）	ku.ba.]ma	p i. tu	（小浜人。）
	i.rju.]mu.ti	p i. tu	（西表人。）	pa.te.]ru.ma	p i. tu	（波照間人。）
［b 型］	ja.ma.tu	p i. tu	（大和人。）	u.ki.na.a	p i. tu	（沖縄人。）
［c 型］	ta.ra.ma]	p i. tu	（多良間人。）	fu.su.ma]	p i. tu	（黒島人。）
	pa.tu.ma]	p i. tu	（鳩間人。）	ta.ki.du.n]	p i. tu	（竹富人。）

この場合、a 型は、前節で見た小浜島と同様に、語頭から数えて２つ目のモーラに下がり目が出現する型である。これに対して、b 型は（小浜島とは異なり）「平板型」である。また c 型は、最初の韻律語直後に下がり目が出現するような型で出現した。さらに、これらの複合語に主格の助詞 nu＋焦点標識 du を付けた「～人がいる ～nu du buru」というセンテンスの中で発音してもらった場合にも、その３種類の型の区別ははっきりと出現した。

(46) 西表島古見方言の三型アクセント体系（複合語から始まる韻律句その５）

［a 型］	mja.a.]ku	p i. tu nu du…	（宮古人がゾ～）
	ku.ba.]ma	p i. tu nu du…	（小浜人がゾ～）
	i.rju.]mu.ti	p i. tu nu du…	（西表人がゾ～）

	pa.te.]ru.ma	p ɨ. tu　nu du…	（波照間人がゾ～）
［b 型］	ja.ma. tu	p ɨ. tu　nu du…	（大和人がゾ～）
	u.kɨ. na.a	p ɨ. tu　nu du…	（沖縄人がゾ～）
［c 型］	ta.ra. ma]	p ɨ. tu　nu du…	（多良間人がゾ～）
	fu.su. ma]	p ɨ. tu　nu du…	（黒島人がゾ～）
	pa.tu. ma]	p ɨ. tu　nu du…	（鳩間人がゾ～）
	ta.kɨ. du.n]	p ɨ. tu　nu du…	（竹富人がゾ～）

さらに韻律句に含まれる韻律語の数を（meeku）$_{PW}$（pɨtu＝nu）$_{PW}$（munɨ＝nu）$_{PW}$ のように３つに増やし、「～人の言葉が聞こえている ～pɨtu nu munɨ nu sukariburoo」のような文に入れて発話してもらった場合にも、３種類の型の違いは、次のように明瞭に出現した。

（47）西表島古見方言の三型アクセント体系（複合語から始まる韻律句その６）

［a 型］	me.e.]ku	p ɨ. tu　nu	［mu. n ɨ　nu…	（宮古人の言葉が～）
	ku.ba.]ma	p ɨ. tu　nu	［mu. n ɨ　nu…	（小浜人の言葉が～）
	i.rju.]mu.ti	p ɨ. tu　nu	［mu. n ɨ　nu…	（西表人の言葉が～）
	pa.te.]ru.ma	p ɨ. tu　nu	［mu. n ɨ　nu…	（西表人の言葉が～）
	ju.no.]n	p ɨ. tu　nu	［mu. n ɨ　nu…	（与那国人の言葉が～）
［b 型］	ja.ma.tu	p ɨ. tu　nu	mu. n ɨ　nu…	（大和人の言葉が～）
	u.kɨ.na.a	p ɨ. tu　nu	mu. n ɨ　nu…	（沖縄人の言葉が～）
［c 型］	ta.ra.ma]	p ɨ. tu　nu	［mu. n ɨ　nu…	（多良間人の言葉が～）
	fu.su.ma]	p ɨ. tu　nu	［mu. n ɨ　nu…	（黒島人の言葉が～）
	pa.tu.ma]	p ɨ. tu　nu	［mu. n ɨ　nu…	（鳩間人の言葉が～）
	ta.kɨ.du.n]	p ɨ. tu　nu	［mu. n ɨ　nu…	（竹富人の言葉が～）

したがって、西表島古見方言のアクセントは、次のような仕組みにしたがっていると、ここでは記述しておこう。

（48）西表島古見方言アクセントの仕組み

（a）その体系内の３種類のアクセント型は、ピッチの下降の有無とその位置の違いによって区別される。

（b）それぞれの型のアクセントは、次のように出現する。

〈a 型〉最初の PW の２つ目のモーラ（２つ目のモーラがなければ１つ目）に出現

〈b 型〉アクセントがない

〈c 型〉最初の PW の最後のモーラに出現

そして、（33）に挙げた黒島方言の音調付与規則と同じものが適用し、具体的な音調型が実現するものと考えられる。（紙幅の都合で、ここでは繰り返さない。）以下は、そのうちのアクセン

トを持つａ型とｃ型のＨ音調の実現の仕方を示したものである。

(49) 西表島古見方言の韻律構造とａ型とｃ型のアクセントの実現

	PW 1		PW 2		PW 3	
［ａ型］	(me.e.’ ku)$_{PW}$	＋	(pu. su = nu)$_{PW}$		(mu. nɨ = nu)$_{PW}$	…（宮古人の言葉が～）
	［μ μ’ μ］		［μ μ μ］		［μ μ μ］	
	H					
［ｃ型］	(ta.ra.ma’)$_{PW}$	＋	(pu. su = nu)$_{PW}$		(mu. nɨ = nu)$_{PW}$	…（多良間人の舟が～）
	［μ μ μ’］		［μ μ μ］		［μ μ μ］	
	H					

さて、ここでこの（48）に示された古見方言アクセントの仕組みを、(4) の多良間島の仕組み、(11) の宮古島狩俣の仕組み、(32) の黒島の仕組みと比較してみよう。するとこの古見方言には、前節までに検討してきた３つの方言とは大きく異なる、いくつかの特徴があることに気づく。

まず、どの型にアクセントがあるか、という点について、古見方言は他の三方言とは異なる。前節までに検討した他の３つの方言（宮古諸島の多良間島、狩俣、そして同じ八重山諸島の黒島）では、ｂ型とｃ型が有核（アクセントがある型）で、ａ型が無核（アクセントがない型）であった。それに対してこの古見方言では、ａ型とｃ型が有核で、ｂ型が無核、となっている。

さらに、そのアクセントの出現位置についても、古見方言は、前節までに検討した他の３つの方言とは大きく異なる。これまで論じてきた三方言（多良間島、宮古島の狩俣、黒島方言）では、アクセントは、それが指定された韻律語の「次末」モーラに実現した。これに対しこの古見方言では、ａ型のアクセントが、最初の韻律語の「前から数えて」２つ目に置かれるのに対して、ｃ型のそれは「後ろから数えて」１つ目のモーラに置かれる、というような、変則的な仕組みになっていることが分かる。

このようなアクセント体系は、どのような理由で出現したのであろうか。この点に関する考察も、稿を改めて行いたい。

３．４　波照間島方言のアクセント体系

この波照間島のアクセント体系も、平山ほか（1967：53－57）によってはじめて取り上げられて記述され、その２拍名詞には「低平型」と「尾高型」の２つの型があると指摘された。その「低平型」の所属語彙を見ると、「牛、鼻、枝、風、釘、口、酒、竹、爪、鳥、箱、羽、水、人、毛、血、帆、名、葉」などがあり、「尾高型」の所属語彙には「花、色、腕、草、波、山、蚤、骨、甕、傘、肩、針、舟、麦、息、臼、雨、声、夜、桶、婿、蔭、手、荷、火、湯」などがある（平山ほか1967：53）[40]。

しかしながらこの方言でも、このたび、複合語を使って調査を行った結果、３種類以上の型の区別を持つアクセント体系である可能性が高くなった。次の例を、特にそのｂ型のアクセント型

に着目して見てみよう[41]。（この方言も韻律句末に高い音調が出現する場合がある。また、そのピッチの上昇が、一部の型の弁別的特徴となっているらしい。したがって、この方言についても、下がり目の位置だけでなく、上がり目の位置についての記述が必要である。そのため、以下、そのピッチの下がり目の位置には ］、その上がり目の位置には［ を付けて示すことにする。）

（50）波照間島方言のアクセント（複合語から始まる韻律句その１）[42]

［ａ型］mja.a.]gu　pi.tu　（宮古人。）　ju.no.]o　pi.tu　（与那国人。）
　　ku.pa.]ma　pi.tu　（小浜人。）
［ｂ型］（1）ja.]ma.tu　pi.[tu　（大和人。）[43]
　　（2）[u.si.na.a　pi.tu　（沖縄人。）
［ｃ型］ta.ru.ma]　pi.tu　（多良間人。）　ta.ki.du.u]　pi.tu　（竹富人。）

ここでは、ｂ型で出現することが期待される型に、２種類のタイプのピッチパターンが出現していることが注目される。そのひとつは ja.]ma.tu　pi.[tu（大和人）のように、高く開始して最初のほうに下がり目があり、その後、複合語の最後の１モーラだけを高くして終わるタイプの型である。（これを以下、仮に「下降上昇型」と呼ぶことにする。）もうひとつは、[u.si.na.a　pi.tu（沖縄人）に見られるように、どこにも急激な下がり目や上がり目が観察されない「平板型」である。

実は、このうちの ja.]ma.tu pi.[tu（大和人）に見られるような下降上昇型は、ｃ型で出現されることが期待される語から始まる韻律句にも観察される。

たとえば次の例は、波照間島の「～畑」という複合語の前部要素に来ることのできる名詞のアクセント型である。他の八重山諸島との型の対応を配慮しながら、これらの名詞を、ここではＡ、Ｂ、Ｃの３種類の系列[44] に分けて示した。波照間島では、Ａ系列にはａ型が、Ｂ系列にはｂ型が、Ｃ系列にはｃ型が、それぞれ出現することが期待される。しかし、このうち下線で示した語が、前述の ja.]ma.tu　pi.[tu（大和人）と同じような下降上昇型で出現していることが分かる。

（51）は名詞の単独言い切り形のアクセント型、（52a）はそれらに「～畑」という後部要素を付けて複合語にした場合の言い切りの型、（52b）はさらにその複合語を「～から戻ってきた～gara mudurikjan」という文に入れて発音してもらった場合の韻律句部分の（つまり接続形の）アクセント型である。なお、今問題としている「下降上昇型」には、下線を引いて示した。

（51）波照間島方言のアクセント（名詞単独形）

Ａ系列　sji. bi.]ru　（葱。）　sa. ko.]na　（長命草。）
Ｂ系列　ma.]a.[mi　（豆。）　mu[n　（麦。）
　　[a. n　（粟。）　[sa.a　（茶。）　[pa. n. da ma　（パルダマ。）
Ｃ系列　z i.]ma.[mi　（ピーナツ。）　na.]bi.[ra　（へちま。）
　　go.]o.[ja　（苦瓜。）　da.]k. kjo.[n　（らっきょう。）

(52) 波照間島方言のアクセント体系（複合語から始まる韻律句その２）

a．単独言い切り形

A系列	sji.bi.]ru pi.te.e	（葱畑。）	sa.ko.]na pi.te.e	（長命草畑。）[45]
B系列	ma.]mi pi.te.[e	（豆畑。）	mu.]n pi. te.[e	（麦畑。）
	[a. n pi.te.e	（粟畑。）	[sa.a pi.te.e	（茶畑。）
	[pa.n.da.ma pi.te.e	（パルダマ畑。）		
C系列	zi. ma.]mi pi.te.[e	（ピーナツ畑。）[46]	na. bi.]ra pi.te.[e	（へちま畑。）
	go. o.]ja pi.te.[e	（苦瓜畑。）	da.k.]kjo.n pi.te.[e	（らっきょう畑。）
	○○○] pi.te.e	（予測される無標の型）		

b．接続形

A系列	sji.bi.]ru pi.te.]e ga.ra…	（葱畑から～）
	sa.ko.]na pi.te.]e ga.ra…	（長命草畑から～）
B系列	ma.]mi pi.te.e ga[ra…	（豆畑から～）
	mu.]n pi.te.e ga[ra…	（麦畑から～）
	[a. n pi.te.e ga.ra…	（粟畑から～）（ｂ型の無標の型）
	[sa.a pi.te.e ga.ra…	（茶畑から～）（　〃　）
	[pa.n.da.ma pi.te.e ga.ra…	（パルダマ畑から～）（　〃　）
C系列	zi. ma.]mi pi.te.e ga [ra…	（ピーナツ畑から～）
	na. bi.]ra pi.te.e ga [ra…	（へちま畑から～）
	go. o.]ja pi.te.e ga [ra…	（苦瓜畑から～）
	da.k.kjo.]n pi.te.e ga [ra…	（らっきょう畑から～）
	○○○] pi.te.e ga.ra…	（予測されるｃ型の無標の型）

これらの例から、「下降上昇型」が、Ｂ系列とＣ系列の両方にまたがって出現していることが分かる。ところで、波照間方言のｂ型の無標の型は［an pitee（粟畑。）や［pandama pitee（パルダマ畑。）のような「平板型」である。一方、ｃ型の無標の型は ○○○]＋pi.te.e のように複合語前部要素（最初の韻律語）の直後に下がり目がある型である。（(50) の taruma] pitu（多良間人。）参照。）しかし、この「～畑」を後部要素とする複合語について今回得られたデータの中には、たまたまそのようなＣ系列の無標の型はなかった。

さて、この下降上昇型で出現するものを検討すると、それがある特定の音条件にしたがっていることが分かる。この型は、mami（豆）、mun（麦）、zimami（ピーナツ）、nabira（へちま）、gooja（苦瓜）、dakkjon（らっきょう）などから始まる語、あるいは複合語に生じている。つまり、語頭の子音が有声音である語、あるいはそのような語から始まる複合語や句に生じている、ということである。この音条件の発見は Ogawa and Aso（2012）によって初めて成されたものである[47]。

この型は、Ogawa and Aso（2012）が指摘するように、本来のｂ型とｃ型に、あらたに生じたアクセント型である。本稿の（51）、（52）のデータも、この ○]○○＋pi.[tu や ○]○＋pi.te.[e のような下降上昇型が、この方言に新しく出現した型であるというOgawa and Aso（2012）の考えを支持している。つまり、（51）、（52）のデータで、この下降上昇型がＢ系列とＣ系列の語

の両方にまたがって出現しているという事実は、この型がある特定の型の異音調ではなく、この体系に出現した新しい型と考えなければならないことを示唆している。

したがって本稿では、これを波照間島の第４のアクセント型であると考え、仮にここでは「ｘ型」と呼んで、議論を進めることとしたい。そうすると、(50) は、次のように解釈しなおす必要があることになる。そして、語頭が有声音で始まる「jamatu（大和）」「jamatu pitu（大和人）」のような語が、この「ｘ型」に属すものと考えられる。

(53) 波照間島方言のアクセント修正版（複合語から始まる韻律句その３）

［ａ型］	mja.a.]gu pi.tu	（宮古人。）	ju.no.]o pi.tu	（与那国人。）
	ku.pa.]ma pi.tu	（小浜人。）		
［ｂ型］	[u.si.na.a pi.tu	（沖縄人。）		
［ｃ型］	ta.ru.ma] pi.tu	（多良間人。）	ta.ki.du.u] pi.tu	（竹富人。）
［ｘ型］	ja.]ma.tu pi.[tu	（大和人。）		

次は、これらの複合語に「～からいただいた ～gara taboraaran」を後続させた場合の韻律句部分の音調型である。この例では、最初の韻律句内部に３つの韻律語が並んでいるが、このような環境では、４種類の型の区別を、その下がり目の有無と位置の違いによって、はっきりと聞き取ることができる。（これは、この方言が「四型アクセント体系」であることを示唆する。）

(54) 波照間島方言の四型アクセント（複合語から始まる韻律句その４）

［ａ型］	mja.a.]gu	pi.tu	ga.ra…	（宮古人から～）
	ku.pa.]ma	pi.tu	gar.a…	（小浜人から～）
［ｂ型］	[u.si.na.a	pi.tu	ga.ra…	（沖縄人から～）
［ｃ型］	ta.ru.ma]	pi.tu	ga.ra…	（多良間人から～）
	ta.ki.du.n]	pi.tu	ga.ra…	（竹富人から～）
［ｘ型］	ja.]ma.tu	pi.tu	ga.[ra…	（大和人から～）

同様に、次の「～人の舟が見える ～pitu nu funi mirairun」という文の中でも、この４種類の型の区別を確認することができる。この例でも、$(\text{mjaagu})_{PW}$ $(\text{pitu}=\text{nu})_{PW}$ $(\text{funi})_{PW}$（宮古人の舟が～）のように、最初の韻律句内部に３つの韻律語が並んでいる。なお、この方言の主格の助詞は nu であるが、この例においてはゼロ格で出現している。

(55) 波照間島方言の四型アクセント（複合語から始まる韻律句その５）[48]

［ａ型］	mja.a.]gu	pi.tu nu	fu. [ni…	（宮古人の舟が～）
	ku.pa.]ma	pi.tu nu	fu. [ni…	（小浜人の舟が～）
	ju.no.]o	pi.tu nu	fu. [ni…	（与那国人の舟が～）
［ｂ型］	[u.si.na.a	pi.tu nu	fu. ni…	（沖縄人の舟が～）
［ｃ型］	ta.ru.ma]	pi.tu nu	fu. [ni…	（多良間人の舟が～）

	ta.ki.du.u]	pi.tu nu	fu.[ni…	（竹富人の舟が～）
[x 型]	ja.]ma.tu	pi.tu [nu	fu.[ni…	（大和人の舟が～）

さらに韻律語の数を４つに増やし、(mjaagu)$_{PW}$ (pitu =nu)$_{PW}$ (hi)$_{PW}$ (gacji)$_{PW}$のような韻律構造を内部に持つ文「～人の家に行く～pitu nu hi gacji ngun」を発話してもらった。やはり、４種類の型の区別は、次のように明瞭に出現した。

(56) 波照間島方言の四型アクセント（複合語から始まる韻律句その６）

[a 型]	mja.a.]gu	pi.tu nu	[hi]	ga.[cji…	（宮古人の家に～）
	ku.pa.]ma	pi.tu nu	[hi]	ga.[cji…	（小浜人の家に～）
	ju.no.]o	pi.tu nu	[hi]	ga.[cji…	（与那国人の家に～）
[b 型]	[u.si. na.a	pi.tu nu	hi]	ga.[cji…	（沖縄人の家に～）
[c 型]	ta.ru.ma]	pi.tu nu	[hi]	ga.[cji…	（多良間人の家に～）
	ta.ki.du.u]	pi.tu nu	[hi]	ga.[cji…	（竹富人の家に～）
[x 型]	ja.]ma.tu	pi.tu [nu	hi]	ga.[cji…	（大和人の家に～）

この４種類の異なるアクセント型のうち、ｘ型にはピッチの上昇があり、その上昇位置は、最初の文節である「大和人の」の部分の最後のモーラにとどまっている[49]。

以上、本稿では、八重山諸島にもこの「韻律語」という単位を想定して調査をすれば、明瞭に区別される３種の型が確認できることを示した。そしてこの節で扱った波照間島においては、その３種の型に加えて、あらたに出現した「下降上昇型」の存在を認め、最終的にこの方言は、「四型アクセント体系」として分析できる可能性も示唆した。

しかしながら、これはまだ仮説の域を超えるものではなく、特にこの節で扱った波照間島方言のアクセント体系と仕組みについては、島内のすべての集落について、より詳細な調査と分析を行って検討する必要がある。

４．八重山諸島のアクセント体系をもとにした通時的考察

４．１　南琉球祖語にさかのぼる「韻律語」

以上、本稿では、宮古諸島のアクセント記述において必要とされる音韻的な単位のことを、「韻律語」と呼んで議論してきた。そして宮古諸島だけでなく、八重山諸島においても、このモーラや音節よりも大きな韻律上の単位が、そのアクセントの出現位置の決定に、重要な役割を果たしていることを論じてきた。

さて、（本稿で「韻律語」と呼んだ）このモーラや音節より大きい韻律上の単位が宮古諸島と八重山諸島に共通して見られる、という事実は、両者が分岐する前の段階において、この単位がすでに存在していたことを意味する。したがって本稿では、この韻律上の単位について、次のような通時的な仮説を提示したい。

(57) 本稿の（26）に示したような韻律上の単位（韻律語）は、南琉球祖語（宮古・八重山諸

島の諸方言が分岐する前の段階）の体系において、すでに存在していた。

また本稿では、多良間島、宮古島の狩俣、黒島という、かけ離れた３つの地点において共通して、ｂ型は２つめ、ｃ型は１つめの韻律語の次末モーラにアクセントが出現するような体系が観察される、ということも見てきた。この事実に基づき本稿では、この三方言に見られるようなアクセントの体系と仕組みが、南琉球祖語の特徴を保持しているものなのではないか、という仮説も（58）に提示しておきたい。つまり「南琉球祖語」の体系は、３つの型の対立を持つ「三型アクセント」であり、その体系内のそれぞれの型のアクセントは、次のように出現していたもの、とする仮説である。

（58）南琉球祖語の三型アクセント体系（仮説）

〈ａ型〉アクセントがない。
〈ｂ型〉２つ目の韻律語（PW）にアクセントを置く。
〈ｃ型〉最初の韻律語（PW）にアクセントを置く。

このような体系は、現代の宮古諸島の多良間島、狩俣、与那覇、そして八重山諸島の黒島、小浜島などにその痕跡をとどめているようだが、それ以外の方言についても、今後あらたに発見される可能性がある。これは今後の記述研究の課題の一つとしたい。

一方、この体系にみられる（本稿で「韻律語」と呼んだ）韻律上の単位は、おそらく「琉球祖語」にまでさかのぼるものではない、という見通しも、あわせて提示しておきたい。なぜならば、北琉球の諸方言（奄美、沖縄諸島の諸方言）には、モーラや音節（あるいは、地域によってはフット）より大きい韻律上の単位を想定しなければその体系の記述ができない、というような方言は、少なくともこれまでに報告されていないからである。

したがって、本稿では、韻律語を単位とする体系の発生は、南琉球祖語に生じた革新的な変化の一つであると考えておくことにする。つまり本稿では、次のような変化が南琉球祖語において生じた、という説を提示しておきたい。

（59）南琉球祖語に生じた変化（仮説）

モーラ（音節）を数える単位にしていた体系が、「韻律語」を単位にした体系に入れ替わる。

つまり、本稿で「韻律語」と呼んだ単位は、もともと琉球祖語（あるいは日本祖語）の段階から存在していたものではなく、何らかの事情によって、それ以外の韻律上の単位（おそらくはモーラ）に取って代わることによって、あらたに南琉球祖語において生じたもの、と考えておくのである。

さて、もし（59）のような見通しが正しいとすれば、この変化が生じているかどうかが、今後、琉球諸方言の系統関係を考える際の、ひとつの指標として機能するだろう。つまり、「韻律語」という単位を持つかどうかが、北琉球の諸方言と南琉球のそれを隔てる大きな違いの一つということになる。この点に関する通時的な議論については、稿をあらためて行いたい。

４．２　八重山諸島に生じたアクセント変化とそれをもとに推定した諸方言の系統関係

一方、本稿で扱った（黒島以外の）八重山諸島の諸方言の中には、次のような共通した特徴が見られることが分かった。

まず、ａ型の最初の韻律語の、語頭から数えて２つ目のモーラに下降が生じる、という特徴である。この特徴は、本稿で検討した方言の中では、小浜島方言、西表島古見方言、波照間島方言に共通して見られる。これはおそらく、南琉球祖語から八重山祖語が分岐した後に、あらたに八重山諸島に生じた変化の結果であろう。（しかし、この変化は黒島方言には生じていない、ということは、これはおそらく、黒島方言と他の八重山諸島の方言が分岐した後に、後者に起こった変化である可能性が高い。）

さらに、今回調査した西表島古見方言と波照間島方言においては、ｂ型に「平板型」が観察された。これは、この型の本来の特徴である２つ目以降の韻律語（PW）に出現するアクセントが消滅する、という変化の結果だろう。おそらくこの変化も、八重山諸島の一部に起こった革新的な変化の一つだろうと考えられる。これは、今回扱った黒島方言と小浜方言には起こっていない、ということから考えて、西表島古見・波照間島方言がそれ以外の諸方言から分岐した後に、前者に生じた変化である可能性が高い。

このような一連の変化の過程を経て、八重山諸島のアクセント体系は、南琉球祖語の段階から大きく変貌を遂げていったのではないかと考えられる。おそらく通時的には、（58）のような仕組みをもった体系から、八重山諸島（の一部）には、次のような一連の変化が生じたものと思われる。

（60）八重山諸島のアクセント体系に生じた代表的変化（仮説）

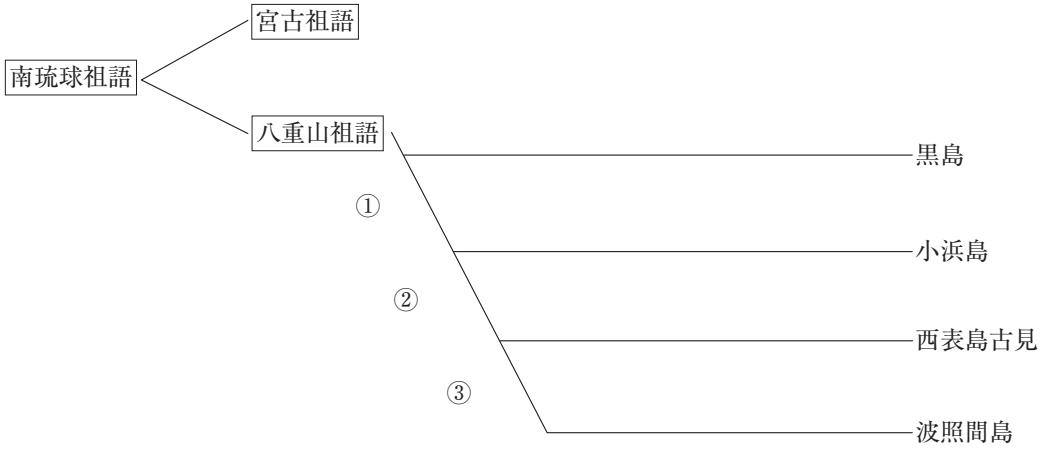
①［ａ型］の語頭から２つ目に下がり目が出現。（小浜島、古見、波照間島）

②［ｂ型］の２つ目の韻律語のアクセントが消滅。（古見、波照間島）

③ あらたに［ｘ型］が発生。（波照間島）

このうちのどの変化を共有しているか、という観点から、今回扱った諸方言の系統関係を推定してみると、次の図に示したようになる。

(61) 八重山諸島のアクセント体系に生じた代表的変化とそこから推定された諸方言の系統（仮説）



今後、この地域の諸方言アクセントの記述がさらに進み、他の八重山諸島のアクセントの仕組みも明らかになっていけば、そのアクセントの現象をもとにして、八重山祖語から分かれ出た諸方言の、より詳細な系統図を描くことも可能になるだろう。これも今後の課題である。

5．まとめ

日本語諸方言のアクセント研究は、従来、アクセントの位置を算出するために必要な単位として、モーラや音節、あるいはフットを前提としてきた。これに対して南琉球の諸方言では、それらより大きい韻律上の単位を想定しなければならない[50]。本稿では、それを「韻律語（PW）」と呼んで議論した。

本稿のもっとも大きな主張は、（北琉球の奄美や沖縄の一部の諸方言と同様）南琉球の宮古・八重山諸島の諸方言にも、明瞭な「三型アクセント体系」が観察できる、という点にある。具体的には、これまで「二型アクセント」であると見做されてきた宮古島の狩俣方言、そして八重山諸島の諸方言のうちの黒島、小浜島、西表島の古見（こみ）という集落の方言に、明瞭な三型アクセント体系が観察されることを、本稿は論じてきた。また、同じ八重山諸島の波照間島方言にも、祖語の３種類の型の区別（系列）が依然として保たれていることも示唆した。

このような記述は、モーラや音節だけを韻律単位としていたのでは可能とはならず、それらより大きい韻律的な単位（韻律語）を想定することによって、はじめて可能になるものと考えられる。本稿の（26）に挙げられたような構成要素から成る単位がそれに当たるが、このような韻律上の単位がそのアクセント位置の算出に働いている、という体系は、他の日本語の諸方言や北琉球の諸方言には、これまで報告がない。

従来の記述研究が、宮古諸島や（与那国を除く）八重山諸島に「三型アクセント体系」を発見できなかったことの原因も、おそらくこの点にあるだろう。それは、この地域の韻律上の単位に関する正確な認識が、我々に欠けていたためであると考えられる。

おそらくこれまでの研究が、これらの地域のアクセントを調べるにあたって作成した調査票

は、（他の日本語・琉球語の諸地域を調査するのと同様に）モーラや音節を韻律上の単位とすることを前提にして、作成されたものだったのではないだろうか。そのために、この地域に存在する３つの型の対立を、うまく捉えることができなかったのだろう。

これは今のところ単なる見通しでしかないが、さほど遠くない将来に、八重山諸島のほとんどの体系に「三型アクセント」の存在を確認できる日が到来するのではないだろうか。南琉球のアクセントには、他の日本語・琉球語の諸方言に存在しなかったようなタイプの韻律上の単位が関与していることが、ごく最近になって[51]ようやく明らかになってきたからである。

今後、南琉球のアクセント調査に当たっては、これまでとは発想を大きく変えて臨む必要がある。南琉球の諸方言のアクセント体系を明らかにするための調査票は、まず、モーラや音節より大きい韻律上の単位（本稿では「韻律語」と呼んだ単位）を想定し、それを韻律句内部に３つ以上連ねたようなセンテンスを作成し、それを使って調査することから開始されるべきである。

このようなあらたな見通しを持って調査をすれば、八重山諸島の他の諸方言にも、琉球祖語から引き継いだ３種類のアクセント型の区別が、まだ忠実に保たれている体系が、今後も報告される可能性が高い。また、その発見に連動する形で、これまで解明できなかったこの地域のアクセント体系の仕組みも、明らかになっていくに違いない。

以上のような見通しを持って、今後さらに宮古・八重山諸島のアクセント調査と記述を行っていかなければならない。

注

１）本稿は、2014年11月14日（金）に松山大学文京キャンパスにて開催された国立国語研究所の共同研究会における筆者の発表「八重山諸島の３型アクセント ―その韻律単位は何か―」の内容をまとめたものである。これは同研究所の共同研究「日本語レキシコンの音韻特性」（研究代表者 窪薗晴夫）の研究成果の一部である。また本稿は、科研費補助金基盤研究（A）（課題番号26244022）「日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の類型」（研究代表者 窪薗晴夫）の助成を受けている。

２）「系列」とは、琉球祖語に存在したと仮定される３種類の韻律上のカテゴリーのことを指す。また「系列別語彙」とは、その３種類のカテゴリー（それぞれA系列、B系列、C系列と呼ばれる）のそれぞれに属する語彙群についての仮説を示す。その詳細については、松森（2000，2012）などを参照。

３）多良間島と同じくこの与那覇方言も、従来「二型体系」だと記述されてきた（平山ほか1967：27-28）。松森（2013b）では、与那覇方言の３種の音調型の区別は、たとえば「[(buugI)$_{PW}$ (naka n)$_{PW}$ (keedu)$_{PW}$]（砂糖黍畑ヘゾ）」のように、韻律句内部に韻律語が「３つ」そろった場合にもっとも明瞭になることを示した。つまりこの与那覇方言では、ある特定の名詞（たとえば「buugI（砂糖黍）」）の音調型を知るためには、当該の語が含まれた韻律語を先頭にして、全部で「３つ」の韻律語（PW）が並ぶようなセンテンスを作成し、それを話者に発音してもらうのがよい、ということを論じた。

４）松森（近刊）では、宮古島与那覇方言と多良間島方言という、この宮古諸島の地理的にかけ離れた２つの言語体系の分析結果から、この二方言が分岐する前の段階の言語体系（おそらく宮古祖語）に、このモーラや音節より大きい単位である韻律上の単位（本稿では「韻律語」と呼ぶ単位）がすでに存在していた可能性があることを論じた。あわせて松森（近刊）では、「宮古祖語は３種の音調メロディー（たとえばLLH、LHL、HLL）から成る声調体系であった」という仮説も提示している。

５）（本稿で「韻律語」と呼んだ）このような韻律的単位がそのアクセント位置を算出するために必要となる言語体系は、宮古諸島以外の他の日本語・琉球語の諸方言には、これまで報告がない。そのため松森・五十嵐（2014）は、このような単位が韻律上の単位として機能している言語体系の発見は、

類型論的観点から見ても重要であることを論じた。

6）松森（2010，2014）では、下がり目の「位置」が有意味である、という点において、この多良間島の体系を一種の「アクセント言語」であると捉えている。一方、そのレキシコンに記載すべき情報は、下がり目の「位置」ではなく、音調型の「種類」である捉えることも可能であり、その観点から見れば多良間島方言も一種の「声調言語」と捉えることもできるのだが、紙幅の都合上、この点については、本稿ではこれ以上論じない。

7）以下、五十嵐ほか（2012）にしたがって、モーラ境界を「.」で、語境界をスペースで表すこととする。

8）以下、本稿では、必要に応じて複合語内部の語根間の境界に（たとえば kuusju＋paru（唐辛子畑）のように）「＋」を付けて示すことがある。また、名詞と助詞の間の境界には（たとえば kuusju＝mai のように）「＝」を付けて示すことがある。なお、当該の文節が「言い切り形」ではなく「接続形」であることを示す場合には、文節末あるいは句末に「pil mai…」のように「…」を付ける。これに対して、言い切り形である場合には「。」をつけて示すこととする。

9）ただし、ａ型名詞から始まる韻律句の中に属格の nu を含む韻律語があると、その直後の韻律語内に下がり目が出現することがある。たとえばａ型の名詞「クバ」から始まる韻律句（kuba）＋（gii＝nu）（paa）＝（mai）…（クバ木の葉も～）や（kuba）＋（gii＝nu）（paa＝nu）（panta）＝（mai）…（クバ木の葉の先端も～）のような構造には、kuba gii nu <u>pa’a</u> mai…、kuba gii nu paa nu <u>pa’nta</u> mai… のように、下線部に下がり目が出現する。このａ型の韻律句に生じる下がり目は、ｂ型、ｃ型名詞の示す下がり目とは、その性質が異なる（五十嵐2015）。本稿では、このａ型名詞から始まる韻律句内に生じる下がり目は、レキシコンに搭載すべき情報としての下がり目ではない（つまりアクセントではない）と考えておく。なお、このａ型の韻律句に生じる下がり目が、どのような条件下で、またどの位置に生じるのかついては、今後、追跡調査に基づいた詳細な検討が必要であるが、少なくとも現時点では、これは「nu を含む韻律語の直後の韻律語に生じる」と考えておく。以上の点についての議論は、別稿にゆずりたい。

10）松森（2010：497）では、多良間島方言のｂ型に出現する下降を「付加した助詞の内部に生じる」と記述している。しかし、この一般化が誤りであったことは、その後の調査で明らかになった。

11）後述するが、これと同じ規則が本稿で扱う宮古島の狩俣方言、八重山諸島の黒島方言にも適用する。

12）本稿では特に触れないが、同じような単位が宮古島の与那覇方言にも観察できることは、松森（2013b）で論じた。

13）狩俣方言の調査は、2014年２月に行われた。調査協力者は以下の４名である。Ａ氏（男、大正15年11月生）、Ｂ氏（男、大正13年７月生）、Ｃ氏（女、昭和４年10月生）、Ｄ氏（女、昭和２年４月生）。本稿で扱うデータは、主としてＡ氏から得られたものであるが、分析に当たっては、他の話者から得られた情報も参考にした。

14）これを確認するにあたっては、まず各名詞を前部要素にした複合語（「油＋味噌、砂糖黍＋畑、大和＋人、八重山＋言葉」など）を作り、それを先頭にして全部で３つ以上の韻律語を並べた韻律句から始まるセンテンス（「油味噌の匂いがする」、「砂糖黍畑から戻ってきた」、「大和人の舟が見える」、「八重山言葉も聞こえる」など）を発音してもらい、その音調型を観察しながら、各名詞がこの狩俣方言のａ，ｂ，ｃのどの型に所属するかを判定する、という手順をとった。

15）多良間島方言と比較すると、狩俣方言は、ａ型のアクセント型の所属名詞の数が極端に少ない。念のため、注14 に述べたような３つの韻律語を並べたセンテンスの中で確認した結果、多良間島方言でａ型で出現する名詞の多くが、狩俣方言ではｂ型となって出現することが判明した。これと同様な傾向が、同じ宮古諸島の池間島方言にも見られることは、五十嵐ほか（2012）ですでに明らかにされている。

16）（多良間島と違って）狩俣方言では、ａ型の下がり目が３つ目の韻律語に出現する場合もあったが、この下がり目は常に出現するとは限らない。たとえばこの例にある suu bari kara]du…（冬瓜畑か

らゾ〜）の場合、同じ話者がその下がり目を出現させず suu bari karadu…のように高い平たんな音調型で発音する場合もあった。また同じ a 型と思われる jacufusa（蓬）の場合は、jacufusa bari kara du…（蓬畑からゾ〜）のように、下がり目がどこにも出現しない。このように a 型は、その下降が出現したりしなかったりするが、その理由はなぜなのか。あるいはこの狩俣方言の a 型の下がり目は、どのような条件下で出現するのか。これらの問題については、現時点では不明な点が多く、今後の調査で詳細な記述を行った上で検討しなければならない。いずれにせよ、（多良間島方言の場合と同様）狩俣方言のこの a 型の下がり目は、その型の本来持っているアクセントが出現したものではない、とここでは考えておく。

17）ただし、すでに注16で述べたように、３つ以上韻律語が並んだ場合には、suu bari kara］du…（冬瓜畑からゾ〜）や suu bari nu cjibi]n du…（冬瓜畑の後ろにゾ〜）のように、a 型にも下がり目が出現する場合があるが、この a 型に出現する下降は、b 型や c 型の語から始まる韻律句にも生じることがある。（(9) の例を参照。）したがってこの下がり目は、a 型の語が本来持つ「アクセント」が表面に出現したものではない、と本稿では考えておく。

18）この調査の調査票は 2014年２月の多良間島方言のアクセント調査のために作成したものであるが、それを狩俣方言の調査にも使用した。作成した複合語は「東＋風、西＋風、北＋風、南＋風」「酒＋甕、水＋甕、味噌＋甕、耳＋甕、海水＋甕」「てりはぼく＋木、豆＋木、芋＋木、ゆうな＋木、松＋木、アダン＋木、ガジュマル＋木、月桃（さにん）＋木、芭蕉＋木、蜜柑＋木」「唐辛子＋畑、胡麻＋畑、砂糖黍＋畑、韮＋畑、冬瓜＋畑、葱＋畑、豆＋畑、麦＋畑、野菜＋畑、さつま芋＋畑、へちま＋畑、ピーナツ＋畑、ひょうたん＋畑、らっきょう＋畑、キャベツ＋畑、苦瓜＋畑、大根＋畑、しょうが＋畑、パルダマ＋畑」「あおさ＋汁、芋＋汁、山羊＋汁」「鰹＋味噌、にんにく＋味噌、唐辛子＋味噌、油＋味噌、島＋味噌、宮古＋味噌、大和＋味噌、豚＋味噌、ソテツ＋味噌」「魚＋てんぷら、芋＋てんぷら、砂糖＋てんぷら」などである。これらに、「〜風も吹く。」「〜甕もあった。」「〜甕の中に入れる。」「〜甕の底が見える。」「〜甕の上に置いた。」「〜畑から来た。」「〜畑の後ろにある。」「〜畑のほうに見える。」「〜木が見える。」「〜木で作る。」「〜木の枝も見える。」「〜木の葉の先端も見える。」「〜味噌（〜汁、〜てんぷら）の匂いがする。」等のセンテンスの中に入れて発話してもらい、その型を観察した。なお狩俣方言では、以上のすべての語彙について調査できたわけではない。

19）言い切り形では jamatu］putuとなって２つ目の韻律語の次末モーラに出現していない下がり目が、属格の nu が後続すると jamatu putu］nu…となり、予測される位置に下がり目が出現していることが分かる。

20）これらの複合語の言い切り形は、調査をしていない。

21）これらの後部要素を、同じような意味を持つ語「fucu（言葉）」に入れ替えても、同じように３つの型が出現する。

［a 型］ja.a.ma	fu.cu	ma.]i. du…	（八重山言葉もゾ〜）
［b 型］ja. mu. tu］	fu.cu	ma.i. du…	（大和言葉もゾ〜）
［c 型］ta.ra.]ma	fu.cu	ma.i. du…	（多良間言葉もゾ〜）

この場合、［b 型］が jamatu］fucu（大和言葉）となって、期待される２つめの韻律語である fucu 内部の次末モーラの位置にピッチの下がり目が出現していないが、ここにも、(13) の例に関連してすでに述べた母音の無声化が関与しているものと思われる。つまり、期待される×jamatu fu]cuのような型が出現しないのは、アクセントが置かれるはずのモーラ fu が、無声化のためにアクセントを担えなくなり、それが原因となってその下がり目の位置が１モーラ分、前にずれたと考えられる。

22）すでに 注16 において述べたように、韻律語が３つ以上並んだ場合に a 型の語から始まる韻律句に出現することがある下がり目は、a 型の本来持つ特徴が実現したものではないと、本稿では考えておく。つまり、たとえば「 jaama＋munii＝ma]i＝du…（八重山言葉もゾ〜）」という場合に、助詞連続 ma]i＝du の部分に出現する下がり目は、a 型の持つアクセントではない、と考えるのである。

23）つまり「韻律語は２モーラ以上でなければ形成できない」という制約が、これらの方言に共通して存在すると考えられる。松森（2013b）の与那覇方言、そして松森（2014）、五十嵐（2015）の多良間島方言、そして Igarashi et al.（forthcoming）の池間方言の記述にもあるように、宮古諸島を通じて１モーラの助詞は、先行する名詞あるいは助詞とともに１つの韻律的単位を形成するものと考えられる。

24）その単位は、原則的に「形態素の境界がどこか」という情報を出発点にして成されるのだが、その最終的な構造は、形態的な構造とはかならずしも一致しない。（松森（近刊）参照。）

25）八重山諸島の調査は、2013年12月、2014年３月、同年５月、同年９月の合計４回にわたって行われた。黒島の話者はＦ氏（男、昭和８年１月生）、Ｎ氏（男、昭和12年12月生）、Ｓ氏（女、昭和８年３月生）の計３名である。（そのうち本稿で扱うデータは、Ｆ氏とＮ氏から得られたものである。）小浜島の話者はＴ氏（男、昭和５年８月生）、Ｋ氏（女、昭和６年８月生）の計２名。西表島古見の話者はＨ氏（女、昭和10年12月生）、Ｍ氏（女、昭和３年４月生）の計２名。波照間島の話者はＵ氏（男、大正13年６月生、北集落）、Ｏ氏（男、昭和21年８月生、冨嘉集落）、Ｉ氏（男、昭和10年８月生、名石集落）の計３名であるが、本稿の分析は主として北集落のＵ氏から得られた情報に基づくものである。

26）管見の限り、平山編著（1988）、平山ほか（1967）、﨑村（2006）をはじめとする、これまでの（与那国島を除く）八重山諸島（西表島、石垣島、波照間島、小浜島、竹富島、黒島、新城島など）のアクセント記述研究では、祖語の３つのアクセント型の区別を継承したと思われる三型体系の報告はない。

27）系列別語彙に照らし合わせてみると、前者はＡ系列とＢ系列の語であり、後者はＣ系列のものなので、この平山ほか（1967）の記述から推定される黒島の系列別体系は、AB／C である。

28）また、本稿で扱ったもの以外の語彙のアクセントをもとに検討してみると、この黒島方言は A／B／C という系列別体系を保持している可能性が高いことも分かったが、この点についての議論は別稿にゆずりたい。

29）これら地名の３種類のアクセント型の区別は、単独言い切り形では明瞭に出現しなかった。私が調査した一人の黒島話者のピッチの型は次のようである。ｃ型の地名は、常に語末から２つ目に明瞭な下がり目が観察されるものの、他の型ではその下がり目が特定の位置に限定できないことが分かる。

［ａ型］	me.e.ku	（宮古。）	ku.ba.ma	（小浜。）
	i.ri.mu.ti	（西表。）	pa.ti.]ru.ma	（波照間。）
［ｂ型］	ja.ma.tu	（大和。）	Fu.ki.]na.a	（沖縄。）
	a.me.ri.]ka	（アメリカ。）		
［ｃ型］	ta.ra.]ma	（多良間。）	pa.tu.]ma	（鳩間。）
	ta.ki.]du.n	（竹富。）		

30）この例のｂ型が、期待される×ja.ma.tu　pu.]su（大和人。）、×Fu.ki.na.a　pu.]su（沖縄人。）のような型で出現していないという現象も、（13）の宮古島狩俣方言で「大和人。」等を例にして検討したのと同じような事情によるものと考えられる。つまり、これらｂ型の語の下がり目が、その２つめの韻律語である pusu の内部の次末モーラの位置にアクセントが出現していないのは、pusu の pu の母音が無声化し、Ｈ音調を担えなくなったためであろう。

31）（27）と（28）の例は両方とも、その韻律句内部に韻律語が２つしか並んでいない例である。それにもかかわらず、なぜ、（27）の言い切り形には３つの型の区別が明瞭に出現し、（28）の接続形にはそのうちの２つの型に中和が見られるのだろうか。その理由は、現時点では不明とせざるをえない。

32）ここでは「竹富人が～」が、期待される×ta.ki. du.]n pu.su nu… でなく、ta.ki.]du.n pu.su nu…となっていることが注目される。このことは、黒島のアクセントは、次末モーラではなく、次末音節

に置かれる可能性を示唆する。この点についての考察は、今後の検討課題としたい。

33）筆者は、本稿で報告する小浜島を1992～1999年にかけて過去に３度、調査している。特に「系列別語彙」に基づいた調査票を使用して調査した1999年７月には、さまざまな助詞を各系列の名詞に付けて発音してもらった結果、この方言が３型アクセント体系である、という見通しを持つに至った。しかし当時は、本稿で論じたような韻律上の単位を想定する、という発想には至っていなかったため、秩序だったアクセントの仕組みをそこに見出すことができず、調査結果をこれまで公表せずにきた。

34）以下、本稿で平山ほか(1967）のデータを引用する際には、その記述にある無声化した音を大文字で代用することとする。

35）これを系列別語彙に照らしあわせてみると、「頭高型」にＡ系列の語が所属し、「尾高型」にＣ系列とＢ系列の語が所属しているようなので、Ａ／BC という系列別体系が推定できる。なお、「山 jama」という語は、系列別語彙の観点から見ると BC型のほうに属すことが期待されるのだが、平山（1967：56）のデータによると、なぜかＡ型の所属語と同じ型で出現している。その理由は、不明である。

36）この（37）の例では、すべて韻律句末の１モーラ（kara du のduの部分）が上昇調で終わっていたが、次の（38）の「～ヘゾ行く」の場合は、句末のモーラ（ngee du のduの部分）に上昇調は感じられなかった。この句末の上昇は、句音調の一種ではないかと考えられるが、それがどのような条件で出現するのかについては、現時点では不明とせざるをえない。今後、さらなる調査を要する。

37）実はａ型の最初の韻律語内部にはっきりした下がり目が出現する、というアクセント体系は、石垣島、波照間島、小浜島など、八重山諸島の広範囲にわたって見られるタイプの体系であると言えるだろう。それらほとんどの方言で、ａ型の前から２つ目のモーラ直後に下がり目を持つ型が観察されている。

38）各型に所属する語の例が少ないため、ここから系列別体系を推定するのは躊躇されるが、この平山ほか（1967）にしたがえば、Ａ／BC のような体系が考えられる。

39）同時に、系列別体系もＡ／Ｂ／Ｃ である可能性が高くなったが、この点についての考察は、稿をあらためて行いたい。

40）ここからこの方言の系列別体系を推定すると、Ａ／BC のような体系が考えられる。これに対し平山編著（1988）では、２モーラ語に３つの型を認めているが、それらがどのような仕組みに基づいているのかについては明確な記述がなく、またそこに提示されているデータからも、明瞭な体系や仕組みを推定することは難しい。

41）波照間島には、北、南、前、名石（ないし）、冨嘉（ふか）という５つの集落がある。集落ごとのアクセントの違いに関する記述は、管見の限り、これまで成されてはいない。本稿で扱うデータは、特に断りのない限り、北集落の話者のものである。

42）これらの地名の単独言い切り形のアクセントは、［ａ型］mjaa]gu（宮古。）、juno]o（与那国。）、iri]mucji（西表。）、［ｂ型］jama[tu（大和。）、［ｃ型］taruma（多良間。）、takiduu（竹富。）となる。

43）このｂ型にみられる２種類の型の音韻解釈については、後述する。とりあえずこの表では、両者とも、ｂ型に入れてある。

44）「系列」という概念については、本稿の注２を参照。

45）この話者によれば、「長命草 sakona」は昔は雑草の一種で、一般的に畑で栽培するような性質の植物ではなかったため、「長命草畑」という言葉はあまり使わない、ということであった。しかしここでは、「もし仮にそのような畑があるとすれば、どのように発音するか」と聞いて、話者に発音してもらった。

46）ここでは、期待される×zi.]ma.mi　pi.te.[e（ピーナツ畑。）ではなく、zi.ma.]mi　pi.te.[e（ピーナツ畑。）のような型が出現した。つまり最初の韻律語が３モーラ以上の場合、語頭のＨ音調が２モーラ以上に拡張することがある、ということである。しかし、このようなＨ音調の拡張は、常に起こる

とは限らず、たとえば ja.]ma.tu　pi.[tu（大和人）の場合は、最初の１モーラだけが高い。このＨ音調の拡張はどのような条件で生じるのか、またこのような特徴は、波照間島の他の話者にも見られるものなのか、等については、現時点では不明で、さらなる調査を必要とする。

47）Ogawa and Aso（2012）は、このような条件によって生じる型を Rising pattern（上昇調）と呼び、「低く始まる」型であると記述している。しかし私が調査した北集落の話者に限って言えば、この型は、はっきりとした下降上昇型（すなわち１モーラ目が高く始まってその直後にピッチが下降し、語末の１モーラで再度ピッチが上昇する、というような音調型）で出現していた。

48）同じ波照間島の中でも、冨嘉（ふか）集落の話者には、ａ型の下がり目が mjaagu]pitu　nu… のように３モーラ目に出現する、という特徴がみられた。その結果、少なくとも３モーラ語から始まる韻律句の中では、この話者のａ型は、ｃ型と合流を遂げているように聞こえた。

［ａ型］	mjaagu］	pitu　nu	［funi ndu…	（宮古人の舟がゾ～）
	kupama］	pitu　nu	［funi ndu…	（小浜人の舟がゾ～）
［ｂ型］	［us ɨ naa	pitu　nu	funi ndu…	（沖縄人の舟がゾ～）
［ｃ型］	taruma］	pitu　nu	［funi ndu…	（多良間人の舟がゾ～）
	takiduu］	pitu　nu	［funi ndu…	（竹富人の舟がゾ～）
［ｘ型］	jamatu	pitu　nu	［funi ndu…	（大和人の舟がゾ～）

なお、この話者は、（本文中で取り上げた北集落の話者とは異なり）、ｘ型の jamatu の部分の１モーラ目が高く始まらなかった。しかし韻律句全体を聞くと、ｘ型はｂ型の型とは明らかに異なる音調型で発音されていることが分かる。すなわちｂ型の場合は、［ usinaa pitu nu funi ndu…「沖縄人の舟が～」のように韻律句全体が高い平板型なのに対して、ｘ型の jamatu から始まる「大和人の舟が～」の場合は jamatu pitu nu［funi ndu…のようになり、「舟がゾ～」の直前に、明らかなピッチの上昇が観察される。

49）この波照間島の北集落の話者の発音では、語句が長くなるに従って、下降上昇型の最後の１モーラの上昇位置が、次のように、後ろのほうにずれていく。

ma]a[mi	（豆）	ma.]mi　pi.te.[e	（豆畑。）
ma.]mi.　pi.te.e［nu…	（豆畑が～）	ma.]mi　pi.te.e　ga[ra…	（豆畑から～）

しかし、この上昇は、最初の文節より後ろにはずれていかないようだ。たとえば「豆畑の中。」や「豆畑の中に行く。」のような場合、×ma]mi pitee nu na[ga（豆畑の中）のような型は出現せず、次のようなピッチパターンが出現した。

ma.]mi	pi.te.e	［nu　na]ga		（豆畑の中。）
ma.]mi	pi.te.e	［nu　na]ga	na[ga…	（豆畑の中に～）

いずれの場合も、ｘ型の上昇は「豆畑の」という文節内部に実現し、それより後ろにはずれていかないことが注目される。

50）また、古くから「３型アクセント」の存在が指摘されながら、（そのアクセント単位は何か、どのような規則によってそのアクセントが付与されているのか、等々）その仕組みについては多くの不明な点が残されている与那国島方言のアクセント体系の仕組みも、同じような単位を想定することによって、今後、解明できる可能性が出てきたと言えよう。

51）五十嵐（2015）、Igarashi et al.（forthcoming）、松森（2013b，2014，近刊）、松森・五十嵐（2014）などを参照。

参照文献

平山輝男（編著）（1983）『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』東京：桜楓社
平山輝男（編著）（1988）『南琉球の方言基礎語彙』東京：桜楓社

平山輝男、大島一郎、中本正智（1967）『琉球先島方言の総合的研究』東京：桜楓社
五十嵐陽介（2012）「南琉球宮古語与那覇方言の名詞アクセント体系：初期報告」『国立国語研究所共同研究報告12-02　消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究　南琉球宮古方言調査報告書』53-68. 東京：国立国語研究所
――（2015）「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』８．広島大学
Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi and Tomoyuki Kubo（2011）. How many tonal contrasts in Ikema Ryukyuan? *Proceedings of the 17th International Congress of Phonetic Sciences*: 930-933.
五十嵐陽介、田窪行則、林由華、ペラール トマ、久保智之（2012）「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』第16巻１号：134-148. 日本音声学会
Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi and Tomoyuki Kubo（forthcoming）. Tone neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan.
松森晶子（2000）「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発―沖永良部島の調査から―」『音声研究』4-1：61-71. 日本音声学会
――（2010）「多良間島の３型アクセントと『系列別語彙』」上野善道 監修『日本語研究の12章』東京：明治書院：490-503.
――（2012）「琉球調査用『系列別語彙』の素案」『音声研究』16-1：30-40. 日本音声学会
――（2013a）「宮古島与那覇方言のアクセント交替―３モーラのフットを持つ方言―」『日本女子大学紀要 文学部』62：1-21. 日本女子大学文学部
――（2013b）「宮古島における３型アクセント体系の発見―与那覇方言の場合―」『国立国語研究所論集』6：67-92. 国立国語研究所
――（2014）「多良間島のアクセントを再検討する」『日本女子大学紀要 文学部』63：13-36. 日本女子大学文学部.
――（近刊）「声調言語としての宮古祖語―特にそのTBUとして機能する韻律上の単位について」田窪行則ほか（編）『琉球諸語と古代日本語』くろしお出版
松森晶子・五十嵐陽介（2014）「多良間島アクセントの仕組みとその類型論的意義」国立国語研究所「レキシコンの音韻的特徴」共同研究会（2014. 6. 22.）発表資料（於　神戸大学）
Ogawa, Shinji and Reiko Aso（2012）Three-pattern Accent System in Hateruma Ryukyuan. 国立国語研究所 International Workshop on Corpus Linguistics and Endangered Dialects. ポスター発表（2012. 10. 11）発表資料（於　国立国語研究所）
﨑村弘文（2006）『琉球方言と九州方言の韻律論的研究』東京：明治書院
Shimoji, Michinori（2009）Foot and Rhythmic Structure in Irabu Ryukyuan. *Gengo Kenkyu*. 135：85-122.